

POSA

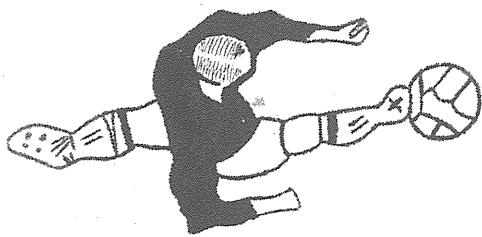
五

崇光學園蹴球部

崇光圖書館藏書

三元本

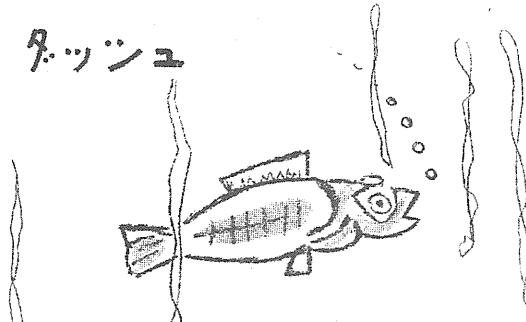
DASH



もしも勇気去らば
全てのもの汝より去る

創立五周年記念

タッショウ



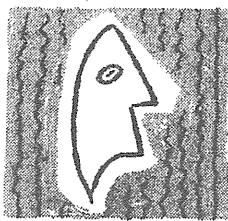
N. 2

目次

「サッカーボ」という字	東郷 寛	3
対小田原高校戦に思う	佐々木民雄	4
ザ・ファミリイ・オス・サッカー	穂原正美	6
蹴球技術の向上	永島暢	7
東日本大会の模様	奥田斐規	10
	金沢洋	14
	加藤陸	15
第一戦を退くに当つて	栗原正壽	19
合宿日記 = 7月21日 — 26日		23
合宿に捨う		31
中学校神奈川県大会 = 中学校の日誌より = 九期生	大泉雄司	34
	石原博	
	菅原俊典	
試錬に打ち勝った中三	泉頭篤	38
「泉頭さん」	田畠哲也	42
	菅原俊典	45
つらかつた練習	市村俊一	46
中学二年生の作文	富野暉郎	48
	宮杉武	49
	大石一之	50
	唯野英暉	50
浦和西高を観て	佐々木民雄	51
円沢に於ける高二部員	金沢洋	53
小田原高校訪問記	奥田斐規	59
◆主な行事	63 ◆編集後記	64

サッカーという字

東郷 覧



新聞や雑誌をなんの気なしにながめていると「サッカー」という活字はどんなに小さくても見落すことはない。今日も「チップス先生」さようなら」というヒルトンの小説をなんか教材に適当などころはないかなあとパラ＼＼とめくついていると、いつとはなく自はやはり「サッカー」と書いてある一節に吸いつけられてしまつた。貴族と平民と明確に区別されている英國。この二つの階級の接近の極く大切なことを心にしているチップス先生の奥さんは学校当局に貰しいイーストエンドにある慈善学校の少年たちとのサッカーの親善試合を熱心にすゝめる。学校側はあまり氣乗りがしなかつたのだが、熱意に負けついに少年たちを上流階級の学校ブルックフィールドに招待した。彼等は試合には

負けたが一日中樂しくこの学校で過し、大方大喜びで帰つていつた。やがて幾年かたつて第一次大戦が始つたが、この試合に出た慈善学校の選者はこの日在つてなかしながら祖国に殉じたのであった。

"ONE OF THE BEST DAYS THAT I EVER HAD IN MY LIFE" といつて

対小田原高校戦に思う

主 将 佐々木 民 雄

ず心配した。

普段から模擬はこの東山、
本大会を目標に練習に励んだ。
いわば小田原との一戦を目
標にこの一学期間練習したわ

栄光は今年も東日本大会の出場権を得た。
ることが出来た。この予選中一回戦の対
小田原校戦は僕が唯一の時入部して以
来経験した約五十の試合の中で最も充実
した素晴らしい試合だった。その理由以外
でもない。全員が勝とうという意氣に燃
えて各自のベストをつくしたからだ。フ
ライトのこもった試合というだけでなく
、両軍ともにフリー・キックなしという美
にきれいな試合であつた。

小田原高校は昨年の全国大会予選で栄
光に4-3で敗れて以来勝敗し、しかも
無失点で新人戦、地区別リーグ戦とともに
優勝という破竹の勢いなので組合せ決定
の時一回戦で小田原とあたって少なから

けだ。実際に試合がはじまつてすぐさま相手の素晴らしいタックルで押されコートナー・キックから一点先取
されてしまった。それから躊躇した栄光は相手の卑
い動きにつられてかスピードが出てきて栄光のバ
ワークと小田原の個人技との猛烈な戦いとなつた。
前半になつてもはじめの半分小田原の車のようバ
ックを破れて中盤を走るもまた押されていたが、相手
はコートル苟め寄せを繰り返して決定的なストップを取
つて猛攻をくわだてたがなにしる無失点のバツク
スだけに再びチャンスも好守にはばまれ残る時間
もわずかとなり、これは対相洋戦(リーグ戦)の二
の舞かとあせりはじめた。時間の経過に比例して芳
せりは大きくなり、タイムアソーブ寸前のあせりが



小田原のネットが揺れた、思わず両手をあげて飛び上つてしまつた。あせりが大きかつただけに、あきらめはじめ暗だつただけにその喜びは例えようもなく大きなものだつた。1-1で結局十分の延長となつた、両チーム最後の力をふりしげ

體に触れた喜びといおうか、この感激はスポーツをあげてとび上つてしまつた。あせりが大きかつただけに、あきらめはじめ暗だつただけにその喜びは例えようもなく大きなものだつた。1-1で結局十分の延長となつた、両チーム最後の力をふりしげ

りぶつかつたが双方とも無得点で抽選となつた。僕の判断一つで勝敗が決すると思ふと恐ろしくなつた。レフリートの右手から震える手で受けとつた紙にははつきり『勝』とするしてあつた。勝つたのだ

。たゞ敗け方にせよ悔いなき一戦だ。世界で最も盛んなスポーツである理由を知つてきました。

この感激は普段の練習を着実に積んでいけば、自然に与えられる喜びである。

どうか部員全員がこの感激を味うよう望んでやまない。

体力と智力と対力在必製とし、一枚協力をねとするこの勇ましいサッカーというスポーツが僕は新ためて無性に好きになつた。

何しろうれしかつた。皆の笑い顔は百年に一度の笑顔だ。試合後のランニングの足並のそろうこと、エールの大きいこと、もう出場決定も当然だつた。

このときサッカーをやつてよかつた、元の處から思つた。

サッカーといいうイギリスのスポーツの神髄





ザ・ファミリー・クラブ・サッカー

三期生 須原正美

先輩／＼と威張るな先輩ヨイヨイ
先輩後輩のなれの果て。後輩／＼
占領するな後輩ヨイヨイ後輩先輩の寄
生虫」とは永島君が考へ出したテ
力ンショの文句。誠にそのものズ
バリである。

タイ焼きや焼きいもをトクサン
にねだる中学生よ、或いは銀座で
おごらす高校生諸君よ、碧蓮の名
は寄生虫であることをよく肝に銘
じておいてもらいたい。同時に僕
達先輩は後輩のなれの果てあるこ
とをいやでも感じないわけにはい
かない運命にあることを悟らねば
ならない。特に僕はこのことを強く
感じる。かつては長くてスマート
だった足は短くなりランニングを
やれば腰が痛み、シラがも大分増
えてきて遂には、オジ・イ・サンと呼
ばれるようになつた自分を見ると

情なくてしかたがない。将棋をやれば「じいさんモ
ウロクしたな」とか「じいさん、タワケタ」と
とたたかれて「孫どもとババ抜きをするのホセキノ
山だね」と云われるに至つては何をかいわんやで
ある

ところでの示力ンショがどこでも通用するかと
いうと一寸と疑問である。ブランドの真中に立つて
後輩を走らせ怒鳴りつけている人間のいる龍では通
用するまい。これが通用するのは本当に心の上にあ
つた部だけである。先輩に不満を持った後輩がどう
して先輩の寄生虫であり得ようか。後輩にけなされ
るので承知の先輩がどうして舍宿にのこのこ顔を出
すのであるうか。ということを考えれば明らかである
。中三はトクサンに親しみを感じるからおごらせよ
うと考えるのであり、じいさんは孫どもが可憐いい
から遊びに来るのだ。

僕はいつもザ・ファミリー・オブ・マンへ入向象
族／＼という写真展を見たが、これをもじつた、ザ
ファミリー・オブ・サッカーという名を蹴球部につ
けてはどうかと思つてゐる。ジイサンがいるし才

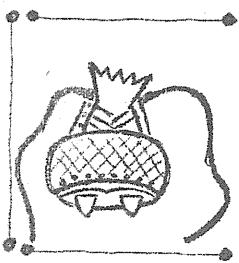
クさんがある、トクサンにタッシャン、目ジロにラマ等全く種々雑多な人間へ？」がいる。中にはアバレン坊もいるし氣の小さいのもいる。賢いのもいるし、たわけ者もいる。しかし蹴球部という家族の中には、誰もが皆樂しみ合い苦しみ合いながら生活していることに違ひない。そしてそこにおのずから親しい感情が湧き、あのテカンショが出てくる雰囲気が生れる訳だ。

二のテカンショの生れる雰囲気こそこれがからの部の發展になくてはならないものなのだ。

先輩と後輩との密接なつながりがあつてこそ、蹴球部が他の部に誇り得るのだ。
寄生虫諸君よ、いつまでも純真な、若い愉快な寄生虫であつてほしい。

これこそ僕達が、君達に魅かれる最大の原因だから。と同時に僕達は後輩のなれの舉てらしく、手力イ」と云うのをつづり出でるかぎり體と打たげたいと思つている。

邪魔物にもされず、健て命にさしさわりがないと信じるからに他ならぬ。



蹴 球 技 術 の 向 上

四期生 水 島

暢

僕達卒業生が高校生の時と比較して左校生である君達の技術がすごく高くなつた事に驚いてゐる。今年の高校生である僕達とどちらが強いでしょう。僕達卒業生が高校生の時と比較して左校生である君達の技術がすごく高くなつた事に驚いてゐる。今年の高校生である僕達とどちらが強いでしょう。

僕は次のような質問をされた。それは僕達の方が強かつたさ。

「永島さん達が高校生の時と僕は高下に答えた。そして一人／＼ポジション別に比較して彼に納得させた積りであった。

所が栄光が東日本大会で四位となるに及んで、僕達卒業生はもつと慎重に考へざるをえなく成つてしまつた。この四位はついていたとも言えるが、やはり一番の原因は、技術が秀れていたことである。

ふり返つて見ると、今の高校生は中二、中三からやつてゐる人がほとんどである。そうすると約三年やつてゐる訳だ。だが僕達はほとんど高校からやつたのであるから、経験から言つても今の高校生に劣つてゐる。

それに自分達の事より中学生を指揮するのが大変だつた。しつかりした練習方法もなかつたので、一貫した練習方法を作り出さなければならなかつた。対校試合の時試合前の練習、試合中の技術、競

度等の事が取扱い入れ、差が大きくなるに随分と時間がかかる。そこで、三回戦、かいす、地区、河のまゝ、後輩のコチラを元配して何十回書うよう実際にやつて見ただ方が効果あるのは当然である。中学生を教えるには、中学生よ

りずっと上手でなければならぬから、僕達も一生懸命だつた。そりは少しだけサッカーをやつた件数の割には、上手くなつたがやはり限度がある。た。

当時の成績は今に比べれば良くはないが、当時の技術では技術以上成績を上げていたのである。

それで、多くの高校生は僕達の不十分な指導の手本に手たので、今は少しお題な点が多いのである。その現状の中学生は前にく立ち、ずつと良くなつてゐる。左右両足

のキック、ヘッドイング、バス、試合運び等多くの處で今までの中学一年である。中学生の時作られた下地がぐんと飛躍するのは、高校一年の終りから高校二年の時であらう。その時を目指して、中学生

生の努力を望んでいる。

今年に入つてからの試合を見る
と、神奈川県内では栄光の技術は
一流である。しかし神奈川県
は技術の低い所であるから、他県
校との試合に見える為には、自分
自身の自覚と努力が必要である。
東日本予選の三試合を見ると、
小田原とは互角であったが、藤沢
、希望ヶ丘との時は完全に技術の
優越が見え、よくぞ「今までの感
が深かつた。

今の中学生が高校生となつて活
躍する時、今以上に对外試合での
活躍を望んでいる。

今まで書いた中で、卒業生が、
君連在校生に技術が劣るよう書
いて来たが、それは同時代の時の
比較で、卒業生の多くは今でもサ
ンカーをやっているのだから、い

つでも栄光先生の挑戦を受け、そし

て、いただらう。

て勝つ自信がある所を附け加えて
おこう。

一、昨年と違ひて個室に泊つたので
何となくまとまりがなくなつた
のではないか。

東日本大会の敗因

今年の東日本大会は昨年の成績

一、あまりに部室がよすぎたのがく
つろげなかつたようだ。

期待されたが惜しくも一回戦で敗
退してしまつた。その日へ試合の

一、相手を少し甘く見てしまつたの
ではないか。小田原のときの気

あつた日の夕食後上智会館の玄
関の階段にすわり込んで今日の敗
因といつたものを笛で考えて見た

一、相手の試合態度にほんのうされ
てしまつた。神奈川県にはあん
なきたないチームは見あたらな
い。

一、合宿の疲れが完全に抜けきつ
て、高一の選手が上つてしまつたこ
と。

一、佐々木、生駒の不調がひびいた

一、おそれなく皆絶好調になつ
つたらおそれなく皆絶好調になつ



日本模様の日 東会



規洋男

斐陸

田澤藤

奥金加

七期生
七期生
八期生

神奈川県予選
本大会対曉星戦
上智会館での二日間

神奈川県予選

・七期生 単打競覇

ク東日本大会ク、これを最大の目標として今まで一生県命練習してきたのだ。それに今年は新人戦

リータ戦ともにあまり良い成績を残していないのでその名譽挽回と

いう意味でも絶体に負られない。
結局は宿敵小田原高を辛くも降して県代表となつたのだが以下はその予選三試合の梗概である。

第一回戦 不戦勝
第二回戦 対小田原校
七月十四日 於希望ヶ丘

第一戦ではあるが事実上は決勝戦の称なものでこの試合に勝つた方が代表になることは決定的ともいえる程大事な試合である。

組合せが発表になつて以来、打

倒す田原を含む誰に夢中で練習したのだ。へあまり熱中しまして時間がたつのを忘れてしまつて、校長先生にお叱りを受ける位)

小田原高とは今年の三月練習試合をして二対〇で敗けている。(ハモつともこの時の栄光のメンバーはひどいものだつたが)

リータ戦無失点の小田高バックに対するにはファウフードがよほど頑張ってくれないと勝てないだろう。うづ「味方バックは一点以内に食い止める」とは可能だらうにこれが試合前の大体の予想だつた。

二時栄光のキックオフで試合は開始された。索の宿敵のバックは強いたるま右蹴り返されて卑くも栄光ピシチ、六分左からコナナー・キック左肩が左腰に決めて小

つてしまつたのにこれなら勝てる
と小田原油断したのか以後は一進
一退。栄光は相手バックの厚い壁
を破ることが出来ず、前半三十分
の時間はたちまち過ぎてハーフタ

イムとなる。

五分間の休みの間に永島さんを
はじめ応援に来て下さった先輩に
いろいろ入智恵子をされたのが効
いてか後半の中頃からは全く栄光
のペースで攻めまくつたが、つい
ていなかというのかボールはなか
なか小田原ゴールに入つてくれな
い。時間はもうない。「残念」打倒
小田原「成らすか」亡応援に秉た
ものは立ちあがつて煽り仕度をはじめる。おそらくこれが最後であ
るう、栄光ファオワード相手ゴール
に迫る!!。駄目だ大きく蹴り返され
た、がまだタイムアップの笛は

田に寝ると次の瞬間白いネットが
サット搖れた、確かにボールはゴ
ールの中にころがつてゐる。一点
入つたのだ同点になつたのだ。

直ぐタイムアップの笛がなつて
そのまま五分ずつの延長に入つた
。もう敗けるなんていう気持は全
々しなかつた。しかし結局その
後両チームとも無得点のまま

からーー。

栄光はリータ戦で相洋に試合開
始後すぐ一点とられそのまま一対
〇で押切られたことがあるが、二
の小田原との試合を見ていた相洋
全員センターサークルに整列。佐
々木君と小田原の主将が進み出て
ジヤンケン、佐々木は例の通り、エ
チヨキで勝つ、くぢをもらつて因
敵の頭をヘッティンタしてしまつ

た。かくして早くも小田原に勝つ
のである。尚この試合はフリード
東郷に渡つた。美事なセンタリング
キックをしていう美にきれいな好
たがボールはゴールにいかずIW岩
田に寝ると次の瞬間白いネットが
サンだつた。メジサンいわく、「
横からのきいていたら、ニクダキ
クならニクシキじやないと鬼つた
からーー。

この独選のとき一番はじめに「
勝つた」と声をあげたのはメジロ
サンだつた。メジサンいわく、「
（月）がチラシと見えたんだり敗
て眼のふちに打撲傷を負つた。はれ

てきたので氷で冷して いたが、途中でその氷のかけらを食べてしまつた。

第三回戦 対藤沢高

七月十五日 於希望ヶ丘

同然、皆気楽に試合をする。キツ

クオフ後四分の一息目が入つて、それから試合終了まで攻めっぱなし。後掲の表を見ればわかるだろうがショートの数でも二十九対二と問題にならない。

昨日の你に見ていてる方でも汗びっしょりになり試合が終つたときには波れさえを感じるというのとはうつてかわつて全々クライマックスのない凡試合であつた。それで試合の経過は書かずに今日のエピソードというようなものを書くことにする。

京浜急行の新車が運転をすべりだ

始りの電車(相模鉄道)はノン

トランバツクがホームにとび降りてしまつた。香木のだ。仕方なく彼

は次の金沢八景でありてとりにい

トしたのである。

七月十六日 於法政二高

同然、皆気楽に試合をする。キツ

クオフ後四分の一息目が入つて、僕達の試合が終つて明日の相手

を決める希望ヶ丘対相洋の試合を

見ていた。相洋元気なく四対〇と

負けている。ハーフタイムになつ

た。すると何を思つたか中二の小

澤君相洋が集まつている方にかけ

ていって何か話をしている。何を

してきたんだともどつてきた彼に

聞くと「相洋、頑張つて下さい。」

クスのない凡試合であつた。それ

と激励してきたのだそりだいやは

試合場である法政二高につくと
一校を破つた鎌倉学園が翌嵐と戦
つてゐる。結局鎌倉が翌嵐を破り
最初の代表校が決つた。

は「クウ」をだして負けた。何だかいやな予感がしたがこの予感は試合がはじまるとすぐふつとんでしまった。十五分までに四分、五分、七分、十一分、十三分、十四分と、六点入れてしまつたのである。この割合でいくと二十四点入るはずだ専と冗談をいいあつてはその後は腰をゆるしたのか押しつぶけたが二点しかそれなかつた。しかし八対〇では話にならない。昨日相洋は余程どうかしていたのだろう。ともかくこれで代表に決つたのだがどうも気分が出ない。この日は高三の人人が大勢応援に来てくれた。

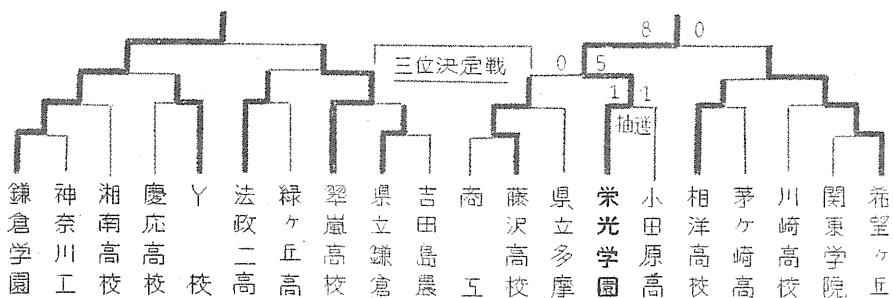
試合終了後いつもの通り法政二高のダブルドアをかりて反省会を行つて合宿の計画等を聞いて法政を出たのは七時過ぎだつた。帰り路先輩

に全員タ水々を御馳走になつた。
第一戦以外はほとんど試合の様な気がしなかつたが、いずれにせよ七月三十日から東大御殿下グランドで行われる本大会で頑張ることだ。

スコア				
崇 光	14	Shot	19	
	0	P K	0	
	74	F K	3	
	10	C K	02	
	14	G K	18	
栄 光	29	Shot	2	
	0	P K	0	
	2	F K	9	
	7	C K	1	
	7	G K	22	
崇 光	17	Shot	2	
	0	P K	0	
	1	F K	3	
	4	C K	3	
	5	G K	13	
		小田原高 藤沢高 希望ヶ丘	伊橋美 宇佐川 小加生 藤駒 金澤 中村 生駒 岩田 中島 岩田 岩田 希望ヶ丘	
			メンバー	
			RW 東郷	
			8(3)	
			RI 金沢	
			2(0)	
			CF 中村	
			17(5)	
			LI 生駒	
			9(2)	
			LW 岩田	
			17(4)	
			()内は ゴールイン	

第六回東日本高校サッカー選手権大会

神奈川県予選 (三位まで本大会出場、決勝戦なし)



本大會對曉星戰

七期生 金沢 洋

一回戦。相手は東京隨一の曉星高。

一回戦とはいえてこの試合に勝てば」という大事な試合である。七時起床。玄関前で体操をして七時半頃朝食をとる。午前中は試合に備えて皆十分休息をとつた。「一時四十五分にキックオフなので十二時頃グランドにおりて練習準備。一時頃から軽い練習を行つた。グランドでは静岡高と甲府工高の試合が行われた。まわりをみまわすと各校の応援団が相当きている。栄光も中学生や高三の人達が多数応援にきている。

今日は天氣はあまり悪くないが、非常にむしろつづきの調子もあまりよくない模様である。高三のナ力さんや東郷は足が痛いらしく、その他皆ファイトはあるがどうもだるいという顔つきである。

一時四十五分キックオフ。栄光は早く自分のペースに持ちもう。"という作戦であつたがやゝペースは乱れ気味。しかし前半は相当押し気味に試合をすゝめた。はじめているが相手のきかないフレーにさまたげられたり又オフサイドなど実際ついてない。とうとうハーフタイムとなってしまった。先輩達に「大丈夫この調子で攻めれば勝てる」と励まされて後半にのぞんだ。だがイレッスン。確かに相手はたいしたことない。決つして勝てない相手ではない。唯栄光についていなくて相手が運がいいだけだ。何とかして三点たたき出さんと必死に攻める栄光もゴール前あと二歩というところのものにならんでしまつたもので一寸あつけな取点をとられてしまつた。この一点は左隈にコロコロところがリ返りかつた。しかし栄光は自信満々で攻めつける。十六分相手に二点得点を許して二対のとされたまま前半二十五分を過ぎてしまつた。「前半二対一にまでしておかないと一寸まずいぞ」という声があちこちで聞かれる。栄光は猛攻を続けているが相手のきかないフレーにさまたげられたり又オフサイドなど実際ついてない。とうとうハーフタイムとなってしまった。先輩達に「大丈夫この調子で攻めれば勝てる」と励まされて後半にのぞんだ。だがイレッスン。確かに相手はたいしたことない。決つして勝てない相手ではない。唯栄光についていなくて相手が運がいいだけだ。何とかして三点たたき出さんと必死に攻める栄光もゴール前あと二歩というところのものにならん

す、何しろ相手キーパーはものすごい巨体だから。その中相手ハーフのロビンタ失敗と思われるのが、ゴール前でポンとはすみ祇栗原の頭をとびこえてゴールにとび込んだしまった。この一点は誠に惜まれる失点であつた。三対〇栄光には一寸あせりが見えて来た。フォードは中村がやや不調で山と

の名コンビをもつし生駒が試合開始直後の真傷で元気なく。それにいつもチームを引っ張っていく主将佐々木も元気がない。

試合時間はもう五分足らずである。しかし栄光は小田高の時同様最後まで試合を捨てない。ゴール前中村にボールが渡つたフリーである。中村落着いて左隣に鮮やかなシュート一点を返した。そして又すぐ最後の猛攻にかかる。二十

九分遙に相手のきたないフレーがPKにとられ山岩田が奥に見事に決め三対二と迫つたが及ばず遙に決め三対二と迫つたが及ばず遙に敗退という番狂わせとなつてしまつた。しかし「残念だったな」と大阪に行つて全国大会に参加したと

き六甲の校長先生のおっしゃった言葉が頭にうかんできた。

翌日七月二十七日、やはり東日本大会出場決定の舞鶴学園高校との練習試合を行つた。この日、試合は九時から始まる予定だつたので皆八時半頃栄光のクラシンドに集合したがどうしたことか相手はなかなか現われず気が抜けてしまつた。相手が現われたのは十二時近くだつた為試合は十二時過ぎになつてしまつた。その為かファイトがわからずあまりおもわしい試合は出来

上智会館での一日間

八期生 加藤陸男

県予選第一回戦の対小田原高校戦に一対一となり抽選で勝ち、二回戦の藤沢高校、三回戦の希望ヶ

なかつた。友達に聞いても、やは
り戦う気がないといつてゐた。そ
れでも合宿の成果が現われたか、
何の苦労もなく五対〇で勝つてし
まつた。これで栄光も県下第一とい
うわけで三十日からの東日本大会
への自信が高まつた。

一七月二十九日午後、昨日一日休
んだがまだ合宿の疲れを残したま
ま上智大学学生寮に入つた。昨年
上智に泊つたところはトタン張りの
カマボコに入れられ、その場でに
まひつた。そうであるが今年泊まる
この寮は近代建築の建物で割合涼
しく住み心地はとてもよかつた。
寮内では一部屋に二人ずつはいり
食事は一階の食堂で食べる」とい
なつた。荷物の整理が済むと皆明
日からの大会に対する緊張と兴奋
の急からか疲れた色も見せず大学

のグラウンドを借りてさうそく練習
をした。グラウンドには明日の大会
までおり、練習をする間もこちら
を覗いていた。その朝、元来氣の小
さい僕はあがつてしまい、練習ら
しい練習も出来なかつた。この夜
は先輩永島さんとの話で時を過し、
十時就寝となつた。僕はベットの
ふとんにもぐり込んだが、鼻苦し
じの上興奮とでなかなか眠れなか
つた。

明くれば七月三十一日、朝の体操
も気持よく清ませて食堂に行き朝
食を食べた。それからすぐ申込を
する。すると大会の開会式に出席すべく
東大農学部のグラウンドに向つた。
僕達の来るのが遅かったのが、久
トならずその後、曉星が力走得
て来て、栄光が曉星のペースにま
ま込まれたといふかたちであつた
。ここで栄光は前半二点を取られ
てしまつた。後半、敵のFWに又
一点を取られたが、最後になつて
栄光の反撃が始まります。E中村

が敵のマークを外して独走して一
点をとり、次に敵のチャーチングで
によるPKをし、岩田がきれいに
決め、二対三に追い込んだがすでに
に時間がなく、栄光の調子が出た
と思われたが、タイムアップとな
ってしまった。奥に残念だった。
前半のF中村のショートがきれい
に決まったかに見えたとき、オフ
サイドを取られるようなこともあ
り、実力としては確かに栄光の方
が上であったろう。皆本当によく
頑張ったと思う。寮に戻つてから
も「残念だ。」という言葉を随分
聞いた。去年の成績と、今年示し
た実力とを考えると、来年にこそ
はと思つた。今夜はここに泊り、
明日家に帰ることになつた。夕食
を食べた。二の食事ではとても
腹をいっぱいにすることが出来な

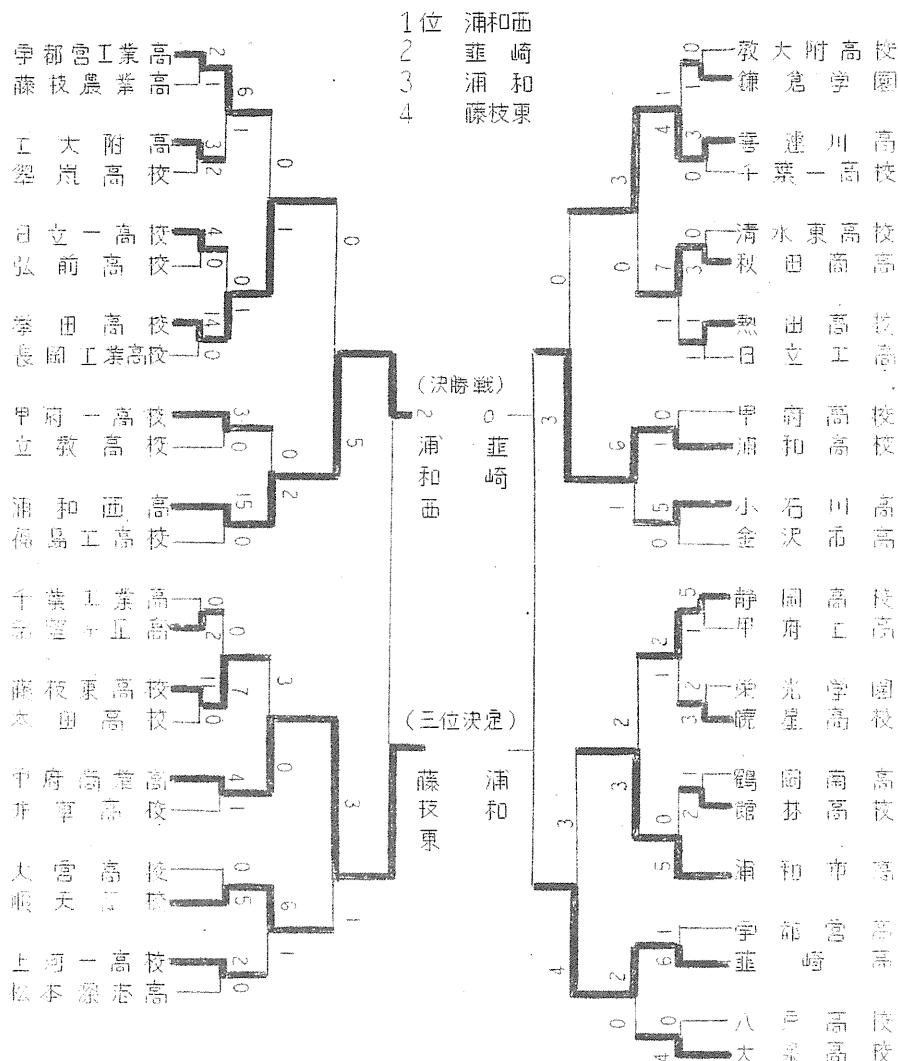
い。他の者も監量が少ないといつ
てはいた。試合の敗因の一つはここ
にあるようだ。夕食後、上智会
階の入口の階段を占領して簡単な
反省会を行つた。他人の批評は行
わなかつたが、各自の感想するとこ
ろはあつたと思う。反省会の後九
時迄自由になつた。皆それぞれ友
達と連れだつてどこかに出かけて
行く。僕も友達と出かけてみた。
まずNTVのテレビ塔を目指してに
歩き、そこがらお堀にそつて四谷
をまわり氷屋によつてから帰つた
僕等の通つた道は全部さびしい道
であったが、これに対し、銀座
へ歩いて来たという看もいた。い
ずれも各々最後の夜を充分味わつ
て来た。この夜もなかなか眠れな
かった。翌日目を覚まし、友達の

注意で気が付くと顔に赤パンを塗
られていた。ほかの看も監やられ
たらしい。誰かが眼ついている間に
いたずらしたにちがいない。食事
の時その犯人が高三の栗原、綱島
兩人だとわかつた。午前九時、こ
こで解散となり、色々楽しい思い
出を残して上智会席を出た。これ
からは自由行動をとつてよいこと
に食つた。僕は二人の友達とエバ
ートへ行つたり友達のお父さんには
映画を見せてもらつたりして一日
を過ごした。夕方、あすけた荷物を
東京駅に取りに行くと偶然今朝別
れた五、六人の友達と一緒にになつ
た。そこでいろいろ見たり聞いた
りしたことを話し合つて帰路につ
いた。途中、着るつもりで持つて
きて全然着かえなかつた下着の包
みがとても重く感じられた。

第六回東日本高校蹴球選手権大会

試合組合せ

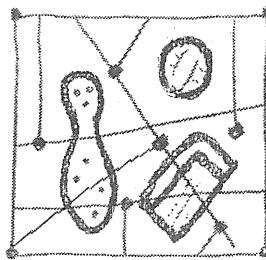
- ◆ 本大会残念ながら栄光は一回戦で敗退してしまったがこ ◆
- ◆ ここにその組合せと、結果を掲げておく。これを一つ一つ ◆
- ◆ 丁寧に見ていくのも又おもしろいものだと思う。 ◆



第一戦を退くに当つて

六期生 票原 正喜

足していないけれどね」とこんな興奮だったそうである。ことわざになかったのが幸いだつた。



「蹴球部に入つて良かつたな。」
「楽しい部生活に何もかも忘れた。
僕達六期生が知らぬ間に奥戦から
遠のかなければならなくなつた。
今日この頃の合言葉だ。過去
の楽しかつた思い出に何か物淋
しさ加わつてこの言葉が心の底でうずまくのである
ある。何が良かつたのだろう。何もかもみんな良かつた。
蹴球を中心に上級生も下級生も一緒になつて
しつかりした規律のもとに楽しむことが出来たこの
生活こそ何よりも僕達の心から離れ難いものである
、辛かつたこと苦しかつたこともみんな楽しい思い
出に変つてしまつた。

僕が入部したのは中三の春。慎重に各部を見て後
の入部である。張り切つて入部届を出した時の東郷
先生の内心は、「まあ入つてもいいさ。今部員は不

た連中は試合にも出てかなり上手で「へえすげえな
あ。」と思つて感心したものだつた。そして六月に
リーグ戦が始まり、運よく僕はサイドハーフとして
後半出場させてもらつた。その日の日記には大変う
れしかつたという意味のことが沢山書かれてゐる。
確かにうれしかつたのだろう。

その年は決勝戦で六角場中に負けてしまつた（後
で練習試合をして雪辱したが）

その頃は僕達がサボリまくつて上級生を困らせた
のも楽しい思い出の一つとなつた。一人だけサボリ
たい日もみんなで協力？してサボリ叱られたものだ
。又当時ランドリには草が生い茂つてい
た。その草むしりも大いに気が進まずこれ又失敬し
てしまつた。けれどもいつもそういうことばかりし
ていたのではない。やるべき時は一生懸命にやつた
。この心構えは今でも相變らず保ち続けている。

のような团结心は蹴球に直接関係のない時にも表われた。例えば遠足等に行った時、僕達のまとまりはよく、又その力にまかせて勢力をふるつた。あるときの遠足では荷物列車に荷がなかつたので強引に車掌に積み込んで我部の専用車にしたりした。思えば本当に心中もないことをやつたものだ。しかしこういうところにしつかりしたチームワークが生れ出る原因があつたのかも知れない。現在の中學部員諸君は練習以外の時にとんなまとまり方を見せてゐるか知らないがそういう時にもまとまっていなければ眞のチームワークは生れない。勿論みなでまとまってサボルなどといふのはよくないことだ。サッカーは強制されてやるものでないので心から愛し楽しむことが大切である。創立以来どこの部員にもあつたこの気持をなくすべきではない。僕達も何をするにつけてもこの気持があつたものだ。これは六期生以後どの部員にも持つてもらいたい。強制されてやるようなものは部員として資格がない。

こうして僕等は先輩にしこまれいろいろなことを在學びながら成長した。だんくと部とともに各自の責任を感するようになり、仕事ぶりも変ってきた。しかし

相変わらず僕達はキカン坊であり高一の夏休みの練習も全部そろつて出た日はほとんどなかつた。五期生の指導者には本当に迷惑をかけてすまなかつた。その結果が国体予選で湘南に、五対〇で惨敗した。余りにもみじめだった。この惨敗こそ後の僕達の練習や試合にどれだけの影響を与えたのか。その年の全国大会神奈川予選では、それこそ台凡の日も練習をさせられた。それで決勝まで行つて負けてしまつたが、崇光の県外進出の足がかりになつくなつた。又この予選中同僚の小松が対戦リ崎戦ですねの所の骨を二本とも折つてしまうという事件を起してしまつた。「再起不能の可能性あり。」などといわれてとても心配した。しかし大争には至らなかつた。入院中勉強が遅れないようにみんなで各科目を分担して教えてやつた。幸い全快し前と全く変らない状態になつたのは不幸中の幸いであつた。

栄光蹴球部で最も大切なものの一つは下級生の指導である。コチラなしで先輩達は僕達をここまで指導してくれたのだ。僕達をここまで指導して

くれたのだ。僕達もこの後左しつかりとつながねばならない。高一の時はさほど感じなかつたが事実上の最高学年である高二になるとこの仕事の難しさを痛感した。最初のうちは何となく恥しいのか思うようにならぬが、二、三回やればすぐ慣れてくるものだ。

僕は指導をする時は必ず名前を覚えるように心がけて、又皆が何を望んでいるかを考へ、自分がやらやるようにならうとした。これが一番楽しく一番有意義な練習になると思つてゐる。勿論彼らの自由にまかせるというのではない。そしていつも上級生と下級生とが親しく話し合うことも彼らを理解する上に大切なことであると思つてゐる。このような栄光蹴球部獨得の雰囲気を保つことこそ次に続く立派な部員が生れる原因でもあり、お互の友情が生れるのである。又彼らとしては信頼のおける上級生と親しく話の出来ることは大きな喜びであると思う。この最大の特長である指導については上級生は大いに研究すべきである。僕の下級生の指導で最も印象に残つてゐるのは、八期生が中三の時の夏の大会前の練習と現中の春休みの練習かもしれない。前者は全員が熱

心であることにおどろき後者の場合はよくついできたと感心した。確かにあの練習は強すぎたかも知れない。しかし「これからも下級生には一度「丙の時はつらかったな」という思い出を残してやりたいものだ。

さて僕達も実戦から離れなければならなくなつた。しかし蹴球部から離れるのではない。たゞ蹴球部員として試合が出来なくなるだけなのだ。これから蹴球部をさらに発展させるのは高二以下の君達なのである。そこで僕達が何を望んでいるかといえば勿論立派な成績を納めることも一つであるが、一番大きな望みは、確固たる伝統を作り上げてもらいたいということである。すでに創立五周年を迎えた。畢竟の残したものに新しい要素を加えながら次々に伝統として消化しつつある現在最も大切なのは決して息ぬきといつた状態を作らないことだ。部の根本的要素のそれに加えて成績の面に於いても出来る限りを望みたい。すでに中学は六角橋中に代り、高校は小田原に代り県の王座の地位をしめた。これを保ち続けるのは確かに技術だけでは決して続かない。

さうに充実した精神的発展が必要である。僕達六期生はそれを望んでいる。僕達が又卒業して後に合宿その他に参加する時、前と変らぬ栄光サッカーの雰囲気と、それに新しいもの加えた我が部を見せてもらいたいと思つてゐる。強くなることは内部の充実を示しているのであり、内部の実力なしに試合のことだけを看えては決して意義のあるものでもないし、決して立派な成績は認められない。最後に僕達六期生を今日までに養ってくれ、又全国大会・東日本大会などをもつて僕達の青春時代に大きな喜びを与えてくれた栄光蹴球部に心から感謝し、後輩の努力奮闘を祈つて筆をおく。

一九五七年七月二十八日

スパイクを四回使う時は

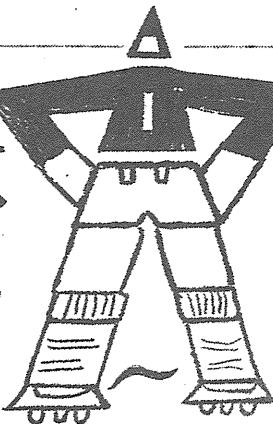


靴を身に入れる時最も大切な事は、その時の感じが良いからといつて貰わないで二、三回はいた後、どんなになるかを考えてみなければならない。始めは丁度良くても二、三試合をすると大きくなつて終う。そこで始めはピッチリしたのを手に入れる、それを使々に馴らすと良い。靴を馴らす一番良い方法は素足で十分位は走廻み始めたたらそれ以上はかないでおく。これを毎日繰り返すと段々伸びて素足に合うようになる。次に薄い靴下をして同じ事をし、最後にサッカーユ用の靴下をして試す。これは最も効果を要するが常に活動し易い靴が出来る。

How To Play FOOTBALL

金庸

7月21日



26 日 於崇光

於榮光

今日より合宿がはじまつた。東京は闘志に燃え時間は厳守していた。参加者は佐々木(民)主将以下石原東郷、金沢、青木、生駒、奥田、篠塚、伊擣、井街、山井、塙谷、平野、加藤、佐伯、佐久間、宇佐美、それに元輩として泉頭、永島浅羽、佐野の計二十一名、更にこの日だけ川畠田元輩が指導にきてくれた。

今年度は合宿をする部が多いので部屋の数がたりず、蹴球部はバレーボール部のあとに入ることになつていた。ところがバレーボール部が午後から帰るので午前中はソフトボールを置いて部屋のあくのを待つた。

ソフトボーラの試合は高一対高二で、技で行うよりむしる力です

るゲームとなり、年長者の嘉三の勝利に終つた。得点はバスケットのスコアのごとく二桁で甚だ際立つた。試合後部屋の前の教室で各自持参のメントラを食べた。これが当六日向母の手づくりのパンを食べられないと思つて、最後の一口までよく味わつた。

昼食後、永島先輩の指導の下に各自重い荷物を背負い中学校校舎の一室に向つた。今年は高校校舎修理のため、合宿は中学校校舎で行われる。

部屋におさまる前に皆一同合宿に使う部屋の隣りの部屋にすわり討論会を開く。この目的は自分の意見を十分に表現できる様にすることを主眼とした。主題は「栄光が何故強いか」、「サッカーのもつ特異点」と、部に入つてから樂しか

つたこと、うれしかったこと、つらかっこしたこと」の三點で討論した。高一、二部員は、この称な場に慣れないので、せいも手伝い、あまり良い意見の交換は見られなかつた。このディスカッションの後練習に入るはじめ体育館で体操、皆の身体が一応軟くなつた後、雨降りのラングドでラウンドキックまでの基本練習をした。雨でグラウンドが全く不良でかつボールが重く、本当につらい練習だつた。しかし初日なのでまだみんなにファイトがあり、つらじ点をカバーしてゐた。

練習終了後、特設二つのシャワーへといつてもあまりにも食弱)で身体を清め、電燈のつかない暗い部屋で食卓に向う。せめて電燈がとも面白くおかしく団体ゲームを、三〇分おくれてしまつた。(但し海の見える夜景をまどの外に九時三十五分に終了。十時消燈であつたが、とても寝にくい夜であつた。外は雨がしと／＼と地をめらし、しづまりかえつた校舎は一趣の感深し。『佐野4・加藤8記』)

七月二十二日(月)曇のち雨
希望に満ちた朝、それほど気持のよいものはない。朝の体操をすませ食事となつた。おかげは味噌汁とたくわんそれに焼海苔であつた。しかしどんぶりのごはんのもう一方の少いのにみんな「これじゃ体力がつかない」とこぼしていた。体力がつかない」とこぼしていた。ところがランニングだけは長いの大急ぎで掃除をすませて練習をしに行つたがよくもこんな因抜けが格別である。一分。一分の休み。三〇秒。三〇秒の休み。三〇秒であつた。それこそ腰に二本の棒があつた。皆が待つてていた僕めし、このおかずは〇〇君曰く……「おれの靴の敷皮みてえだぞ!」そのくらいが楽しい。

入ったみたいである。練習を終つてシャワーをあびて体を清めて夕食にのそんだ。めしを食つて皆、ホッとした頬つき。

夜七時四十五分全員まるくなつてゲームを始めた。ゲームの前にとくさんの「禅の話」があつた。とくさんが七月の始めごろ円覚寺に五日間こもつて座禅したときの事で、奥演を交えて兴味満点の話だつた。次に「ギャンタリ」という名もおそろしいゲームをやつた。これはまずトランプの札により、「ギャングリ」「裁判官」「刑事」を決め電気を切してしまふ。すると、ギャンクになつたものは誰かの頭をなぐる。その時被害者は悲鳴をあげるのでこれによつて裁判官と刑事が犯人をつきとめるというゲームである。暗いのでスリル満点

でみんな楽しんだ。次に二組にわかれで、箸による「紙の環々」のり「長い競争」というのをやつた。これは一組三人で、バンドをぬいたリトレパンをぬいだりして結びつけ、とにかくどんなことをしても長くした方が勝ちというゲームでA組は白石さん、石原さん、加藤君、B組には奥田君、宇佐美君、佐伯君が入つて激戦となつた。しかしB組の善戦空しく敗れた。だがおどろくなれ、両軍とも長さはなんと教室のたてを一往復半。両軍の差はほんの七〇センチほどだつた。この日も十時ころ床につけられた。

（東郷7・塩谷記8）
三日目を迎えると、みんな楽しんだ。次に二組にわかれで、箸による「紙の環々」のり「長い競争」というのをやつた。これは一組三人で、バンドをぬいたリトレパンをぬいだりして結びつけ、とにかくどんなことをしても長くした方が勝ちというゲームでA組は白石さん、石原さん、加藤君、B組には奥田君、宇佐美君、佐伯君が入つて激戦となつた。しかしB組の善戦空しく敗れた。だがおどろくなれ、両軍とも長さはなんと教室のたてを一往復半。両軍の差はほんの七〇センチほどだつた。この日も十時ころ床につけられた。
今日は青木が食いやがつた。
夕食は今日はソーセージが付いていてうまかつたがハムを買ってきたのはよかつた。

夜は永島の『Convalescence』に於ける度胸について、と題する講義があつたが、僕はつかれて、ねむくて仕方がないからねでいた。

今日の日記はその日に書くものだ。『亡いう』とを悟つた。

《泉頭4・山井8記》

七月二十四日(水) 晴
朝おきると連日のつかれでねむ

そうである。朝飯はタマゴにみそ汁。今日はみんなの間にウクレレ

がはやりだし、あちこちでとりつ

てある。平野は千葉へほうじに行

くので昼で帰つた。

浅羽さんが午後からの練習に参加した。今日からハーフマッチが練習にとり入れられた。ハーフマ

ッチはレギュラーとOB中心の混

合軍とでたたかい、混合軍は善戦

してレギュラーウィーで下した。おやつはまた一人分あつたので、ジヤンケンをしたら、そのままに生駒と佐伯が横取りした。

晩めしのとき、永島さんは指導でタロッキーとなり、飯はほとんど食わなかつた。夜加藤・岩田・栗原は海で溺れていた。しかし日はござまかせないもので、いいかい写二に見つかった。

なお、バスケットとハイソサエ

テイー(庭球部)がけんかをして

クロちゃんがマントを巻からほお

り出した。夜の遊びの時、吉ヤン

ク、紙に書くのーをやつた。

ギヤンクで東郷さんは運なく、

二回吉ヤンクになつたがたちまち

つかまえられ、との一回は生駒

さんになぐられた。おジイさん、

午前中の練習はいつもと大体お

た。紙にかくのは、題は「先輩と
はで高一が書く事になり、いちい
ち読んで誰が書いたのかを見てた
が一人も当らなかつた
なあ今日から中三の練習が始ま
つた。(石原と佐久間の記)

七月二十五日(木) 晴たり曇り
明日は午前しかできないから今
日がほとんど最後の練習だ。早い
ものでもう五日目だ。

永島さんの変化にとんだ練習で
みんなあまりつかれの色をみせな

い。昨年に比べ天候の影響も相当

あつたと思う。涼しくてあまり日
も照らず風もあつて練習の効果が

あがる。今日はうつすらと日が照
つた。

ギヤンクで東郷さんは運なく、
二回ギヤンクになつたがたちまち
つかまえられ、との一回は生駒
さんになぐられた。おジイさん、
午前中の練習はいつもと大体お

た。紙にかくのは、題は「先輩と
はで高一が書く事になり、いちい
ち読んで誰が書いたのかを見てた
が一人も当らなかつた
なあ今日から中三の練習が始ま
つた。(石原と佐久間の記)

午後の練習は開始五分前頃には、全員あつまって、永島さんがグランド一回させるものがいないと残念がる。今晩は工芸大会をやるので練習、食事等三〇分くり上げて二時半より開始。そろくランにもかわってコンディションは上々スローインのコンディネーションを前日につづきかなりやり、コンビネーションには Soccer Coaching おとつたものを入れてみたりした。

又新しい練習方法として十一人がターンの一つのサイドに各ポジションについて GK からのボールをまわすというのをやつた。これはエモストレーションとしていつも試合の前にやうと良いと思つた。最後にレギュラーと O B 中心としたチームと練習試合を行つた。今度は特にバックスを強化するため

に O B 軍には FW に穎原さん、永島さん、浅羽さんと入つて個人技で攻撃した。昨日は O B が勝つた代表の地位をとられまいとがんばり 1-0 で O B を破る。最後の腹筋は一分、一分、四〇秒で体中の筋肉がこわばつてくる程だつた。やはり練習をおわつたあとは何ともいえなく気持の良いものだ。

恒例の工芸大会はボリューミーながらはじまる。中三の佐藤と大泉の歌にはじまり高一・高二・高三と三〇分間で用意した出し物のを披露したわけだがその中で高三が鮮やかな放送劇をやつた外は、全部先輩をつづくかえ歌だつた。

どの学年も考えることは同じだつた。高三のそのかえ歌の中に先輩朝から雨なので今日の予定は全

とうたつたが、先輩各人「僕弁解する訳じゃないけど!」「いや僕も弁解しなくちゃならないかな」と先輩側これに対しテカソシヨ

ー で一人々々つるしあげて対抗。それからいつもの你にまるくなつてゲームなどをを行つた。途中でムカツがでて大騒ぎをした。また、

部くるつてしまつた。午前中練習
午後は試合のはずであつたが、午
前中の練習は個人々々の技術批評
となつてしまつた。皆自分の意見
をのべたり外の人の批評を言つた
リ仲々活潑だつたが、二時間半の
長時間になつてしまつたため小数
のものはだれてしまつた。

にまかせてもらいたい。そして、先輩はその欠点を補つてもらいたかった。ということもして僕も成程その方がよかつたのではないかと今反省してみてそう思っている。

二
總評

合宿の第一の目的は技術の向上である。それと共に練習以外の時に部員相互のコンビをつくるということでも重要な目的である。毎年の合宿の最初の日は雨にたたまれて計画通りに行かなかつた。ターランドがわるいとドリブル、バス等サッカーのほとんどの練習の効果が上らない。何よりもこまるのはボールが重くてキックが思うように出きないということである。

等サツカーノのほとんどの練習の効果が上らない。何よりも「まるのはボールが重くてキックが思うように出きないと」いうことである。しかし始めの日は首まだ元気で、

ファイトもあり重いボトルをさして苦にはず織っていたようであった。二日目も雨で初日と同じく練習計画がはからなかつた。練習方法もだいたい前日と同じようなことをした。雨がこの日も続いたので合宿中にタランドがよくなるかどうか懸念された。又雨の練習の後は相当緊張していないと風邪をひくので今後部員は是非このことを注意してほしい。三日目に入り雨はやんだが暗とはならずともりなのでタランドはまだわるかつた。しかし水はけの良いソフトボールタランドがあつたので大変助かつた。このタランドを合宿が終る日まで毎日つかい、テコボコのサッカーフランドではできなかつた基礎練習をここでみつちりやつた。前の二日が雨、そして三日目

になつたので部員もそろそろだれ
てきた」と、高三の練習参加で皆
が元気づいたのは非常に嬉しかつ
た。ブランドがわるいためこの日
やる予定だったコンビネーション
もできず、フォワードのシュート
までしかできなかつたのは残念だ
つた。だが雨でなかつたのでボー
ルが軽くなつてきた。

自ら目にやつと青空が見られた
ボールが前にくらべてずっと軽く
感じられ前の雨がかえつて良い結果
を生んだようと思われた。練習の
方法も午前中は個人的な争、午後
はチームプレーを中心として練習し
た。特にサイド・トライア・ヘッジ
ティング、スローイン、ラ・ウンディング
キック等は急にうまくなりっこない
いから毎日やつた。又高一だけに
小時間の練習時間をあて、二、三

四の三日間個人的に練習をさせたが、これは高一にとつて相当役に立つたのではないかと思つてゐる。このようく時間がかかる割に多くの人が練習できないこの練習方法は非常にせいぜいなものであるから高一の各人はそのつもりで練習をしてもらいたかった。この日からコンビネーションを入れハーフマッチを行つた。このハーフマッチは今までの練習を全部とり入れ、又試合としての興味が入るのだから皆がまじめにやれば仕上げにして一番良い練習方法だと思う。

五日目、六日目が雨となつてしまつたのでこの日が最後の練習となつてしまつた訳だが、午後はスローインの練習、コンビネーション、ハーフマッチで練習を終る。

今年の合宿の方針として少い時間

に出来るだけ効果が上るようにつとめた。それで一つのものに長い時間をかけなかつたので何だか物たりないと思う人もいると思う。しかし一つの練習にあきるまえにテンポを速め次の転換を速くしたので疲れを覚えさせないつもりであつた。指導は高一の時から四年間やつてるので練習方法にはいたさざかの自信があつた。やりたいことも沢山あつたが時間がどんどんとたつてしまふので多くの練習をやめなければならなかつた。又音稽六日向というのも何だか物足りないような気がした。時間が少い日数が足りないといつてもやはり最後のコンビネーションまでやらなければならぬのであるから何か足りないということが出てくるだろう。僕がフォワードなのでや

はリバッタの練習が足りないようであつた。今後この点を反省したい。又今年は新しい練習方法を多く採用したがその中で良いと思われるものは今後どしどしあらう。

又特に僕が強調したいのはサッカーの試合は一応キックが出来ることになれば後はトラッピングの上手・下手で出来るのではないかということである。だから毎練習時に必ずトラッピングの練習をする

人が少しずつでも遊び方を持ちよつたら今年よりもずつ上るらしいものになると思つてゐる。

徳先生の又点といわれる話会うということについても月に一度位そういう機会を設けてやつたよ

さで今年の合宿では練習外の時間の使い方は上手にいつたのではないがと思つてゐる。オヤツの時間が一緒に円くなつて食べること等は特によいのではないか。夕食後、就寝までの時間も夷に樂しかつた皆と一緒に晝が同じことをする

ことにより試合中のチームワークが生れてくるのだと思う。今年は会の進行、ゲームの司会等主として僕がやつたが来年からは多くの人が少しずつでも遊び方を持ちよつたら今まで前述のものである。

最後に僕の言う事を何でもよく聞いてくれた部員一同に感謝している。リーダーが信頼されることがリーダーにとって一番うれしいことだ。僕もそのためにはできるだけのことはしたつもりだし、今後もやうしたい。僕がこの合宿でうれしかつたことは高三の合宿参考に合宿参加券があり合宿に活気をもたらした。しかしこの合宿の中の目的は東日本大会の為の練習加と高一部員になか／＼骨があることだ。僕もそのためにはできるだけのことはしたつもりだし、まだ高二の合宿運営がうまくは

合宿に拾う。

●水泳事件

わが琉球部はゴツツイ奴が大勢いるがその割に皆規律正しいのである。しかし時にはそれを忘れてしまう者もある。ある朝東卿先生が「夜海で泳いだ看があるようだが今後その様なことのない様に」と注意された。そこで頭をかいたのは栗原さんと岩田さんともう一人であつた。前の二人には皆納得したが、他の一人には一寸驚いた様だつた。というのは級長をやつたり、Aオナスをとつたりする奴なのである。この時以て彼は根は悪いんだとすつかり評判を下げてしまった。

●座禅の話

二日目の夜だつたが泉頭さんが学生座禅に行つた話をした。その話の中のお茶をついでもらうとき手をあわせこすりあつていてもう沢山というときパシット片手をさし上げるという珍妙なか

つこう水、皆のお気に入りとなつて食事のときお茶をついでもらうのに盛んにあちこちで手をこすりあつていた。

●プリンナーのボマード

合宿中最も樂しかつた事の一つは夜晩で集つてゲームをする時であつた。まずいる／＼なものを集め、それに名をつけて、その名を間違えずに云つてまわすゲームをやつた。その時使われた名を紹介すると、スリンナーのボマード、くつのしき皮には合宿のトンカツ、マリリンモンローの枕、将棋板は永島さんの顔、大きなく枕にはめしたきのおばさんに見せるトクサンの胃袋、青木のオコッ入札等皆一本足りない者のつける名前であつた。尚中に東京都下特許許可局のチリトリというのがあつたが、イツバチは遂に最後までこれが出来なかつた。イツバチならずとも一寸いいにくいから試みにやつてごらん。

●合宿の食事についての――。

第一日目夕食が終ると直ちに全員集合し、真剣そのものの討論会を開いた。題は勿論「合宿のメシ」である。ここで最も良い意見を述べたのは吉わすと

したトクサンである。次の桜な意見が主であったた

一、メシの量が少いこと。

一、コンニヤクやいものテンヌラは栄養が少く食
うだけむだであること。

一、テニス部等と一緒に考えられては困ること。
もういど位腹がへるか知つてはどうか。

最後に全权大便としてトクさん、オテン、イツパチ
チなどのガツツキを隨員として派遣しおばさんにい
ろいろの話をしてくることを決定し閉会した。だが次
の昼食がトンカツとシユーマイと悪くないので大便
達はいささか調子抜けして行くのをやめてしまつた
。それにイツパチはやさしい人になつてしまつたし
、オテンはゲームの時メシたきのおばさんが好きで
あるとされてしまつたのでこの話は立ち消えとなつ
てしまつた。尚今晚から夕食の時蹴球部だけでハム
でも買って喰いつけることにした。

▼ 今だから話そう

▼ その一 永島さんの話

永島さん的心臓には確かに毛が生えている。その

理由は永島さんの話正解ければわかるだろう。以下は
永島さんの話である。

「大学がひまな時英語会話をマスターしようとし
た。それにはまずとにかく実際に話をすることが大
切だと思つたからアパートの外人の多く乗そうな所
で適当な人を物色してかまわざ話しかけていった。
なるべく一人でいる人がいい。そして調子よくいつ
たらテバートの中を案内してやるそしてチャツカリ
コーヒー等をおごつてもらつて、時には土産までも
らつたりする。こうすれば英語はうまくなるし、外
人の考え方もわかるし、日本親善にはなるし、外人だ
つて喜ぶし、コーヒーはおごつてもらえるし、時に
は美人だつていることだし、こんなよいことはない
。君達も大学にでも入つてひまになつたう、やつて
見るといい。」平気な顔してこれだけのことを語つ
たが、さて心臓が言うこと五回くらうしようか。

▼ その二 浅羽さんの話

今は昔、タランドのそばにコヤシタメがあつた。

ある日の帰り道「」に見事に落つたのが浅羽さんで
あつた。しかし何の因縁かこの時から落ちた方の足

がよく蹴れるようになったそうだ。これを聞いた誰かが「ウワー、おれは両足落ちなれば駄目だー。」合宿に入る日つまり七月三十一日、この日集合時間がうんとあまつてしまつたので日誌に書かれている

こととも出るではないか。」とか各自が考えるようになれば、そしてそれをこの次の機会に発表したならばそれでこの試みは大成功だといつてよいだろ。

間がうんとあまつてしまつたので日誌に書かれている

栄光は何故強いか。

通り午前中はソフトボールで暇をつぶしたが、午後からは中学校舎の教室に集つて討論会を開いた。目的は自分の考えていること、五十分に述べることが出来るよう力を養成することである。議題として、

一、栄光は何故強いか、

一、サッカーというスポーツの特異点
一、楽しかったこと、つらかったこと、うれしかつたこと

以上三つが上つたが三番目を除いてこのようないに慣れていない高一、高二はあまり意見を出さず大部分先輩が意見を出していたがこれからは今日のことを見なつて又このような機会を出来るだけ多く持つようにして各自努力していこう。

以下、一番目、二番目の議題について出た意見を掲げて見ようと思う。これを読んでいて「いや僕はこうは思わない」とか「そもそもそうだが、こう考え

一、中一の時からずっと引き続いでやつている。
一、他校よりも練習時間が少いということから少い時間に出来るだけ多くの効果が上がるようになると

一、コーチをもたないので意気込みがちがう。つまりすぐ他人から押しつけられるのではなく自分からやるうとする。
一、以上述べたすべてのことから生れることがあるがチームワークが他校にくらべずっとよ。

サッカーの特異点

一、まず第一に男らしいスポーツである」と。

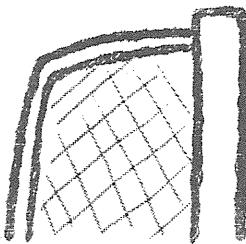
一、団体精神を養うのに最適である。

一、勝敗にだわらない。これは原則として試合中選手交代を認めないと、

試合中個人的行動が許されない同じ団体スポーツでも、野球の場合など自分で盗塁したいと思つたらすれば良いのだがサッカーに於てこういったフレーは許されない。
一、現在のところ日本に於てあまり盛んでないの※

中学校神奈川県大会

= 中学校の日誌より =

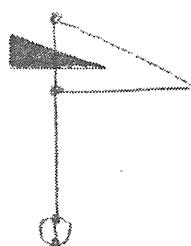


司博典
雄俊
泉原沢
大石菅
九期生

書く時になつて何の資料もないの
で困つていると幸いにも中学校は
日誌をつけているというのでその
中の文章を拝借することにした。
その日誌の最初の頁にはこうい
うことが記されていた。
儀運の日誌だ！
思つたことをちつとも隠さず、
云いたいことをそのまま書こう
文章学のうまいのはよし！
文章の下手なのは更によし！
學の下手なのはもつとよし！
「一
番よし」の部類に入るのは誰
のものであつたるうか。

六月十六日 (日) くもり

対戦吉戦 於大和
最初敵を見た時非常に驚いた。



※が残念だ。
大体以上のようないい意見が出たが
他に意見を持つている人がいたら
どう／＼書いてもつて来てもらいたい。
このダッシュをそのような討論会
で自分の意見を十分に表わすこと
ができるような力を養う手段として
利用してほしい。いやすぐもだ
であるから。〃

というのは体が大きく上手そうに見えたからだ。しかしハーフライ

ンに並んでみるとかえつて体はこちらの方が大きかった。

CF林がトスに勝つてタランドを

とる。キックオフの後十分ぐらい

六分四分で有利。遂に十五分山田

決めて一点先取つづいてすぐCF

林が相手バツクをきれいに抜いて

右隈に決め、前半かるく二対〇と

リードする。

後半秉光ハーフ、フォワードの活躍で再三両回相手ゴールに迫つたが得点出未ず。しかしながら遂に十八分CF林がショートしてダメ押した。

(大泉記)

（大泉記）

秉田ユニホームの片瀬は完全に白山を押していた。

（前半）トスに勝ちタランドの

良い方に攻めることにした。前半

にリードをとり後半肉ばなれのCF

林を休ませる作戦である。

キックオフは浦島であった。し

かしRI佐藤がタッシュしてこれを

とり敵の出鼻をくじいた。三分RI

田代が決めたがに見えたがオフサ

イドでものにならなかつた。しか

しすぐに六分CF林が石隈に決めて

見事先取点をあげた。更に十分ゴ

ール前の混戦からのコボレ球を出し

秉光バツクは攻撃のとき前え出

ているが蹴り返されると球が固い

タランドにはすみ球足が急に卑く

なるのでもどるのがつらかったが

どうやらもちこたえた。(石原記)

大泉が見事に決めて二対〇となる

六月二十五日(火)快晴

しかしこの後バツクが気をゆるし

たため敵CFにアッケない一点をゆ

るしてしまつた。ここでわがイレ

ラン太奮起して十七分初のコーナー

不足で前半五分は完全に押されて

いた。しかしこのピンチを脱する

又三対一と戻った。

（後半）秉光は雨でダチャダチ

やになつた方へ攻めるので特にぬ

かるみのひどい石隈からせめるの

はほとんど不能になつた。そこで

球を左へ集めてせめた。

十分コーナーキックをRI飯田が

ゴール前に蹴り込みこれを後半CF

にまわつた田代が落着いて決める

田代が決めたがに見えたがオフサ

イドでものにならなかつた。しか

しすぐに六分CF林が石隈に決めて

見事先取点をあげた。更に十分ゴ

ール前の混戦からのコボレ球を出

と直ぐ球が敵にもどつて攻撃が開始された。数分で伊林のクリーンショート成って一点先取した。これで少し落ついてプレーが出来るようになつてきました。二点目は伊田代がゴール前の混戦から球をひろつてショートこれが敵のまえでイレギュラーしてコロくと、ゴールに転り込んだもの。市場もこのころが多少しがつきだらしない。右からの球を伊林がゴール前バックスをかねして三点目、その頃からバックスもよく頑張ってハーフラインとゴールラインの真中辺りまでしか相手FWを入れさせなかつた。後半は少し相手バックも奮起してたらしく球はゴール前まで達してショートをしたが惜しくも得点にならなかつた。しかし伊林の右から

のショート相手FWキヤウチせると、猛攻した。この一点で相手攻撃陣はほとんと回復不能となつた。後半バックスはよくしまり相手に得点をゆるさず零封勝をした。

しかし、学生スポーツは勝つことだけが目標ではない。自分のベストをつくして戦うことだ。その点で中三の諸君は決勝までの全試合にベストを尽したのだから本当によかつた。

いよいよ明日は強敵片瀬中学と決勝を行ふ。

（決勝棄権）
（決勝棄権）

一年も前からこの大会を目指して一生懸命練習に励んで来て、そしてその努力がみのつてか決勝まで

順調に勝進んで来た。それも全試合に三点以上の得点を蹴り出し失

敗からも又、いままでのようならアイトでぶつかっていくことだと

思う。

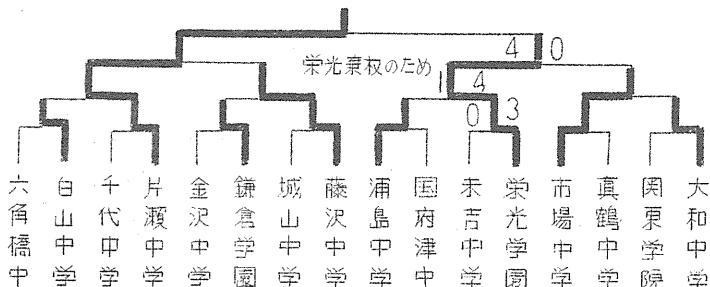
フレツ フレツ 中三!!

各試合のトータル

対戦相手	対戦結果	対戦相手	対戦結果	合計
(栄光)	GK 4 GK 20 FK 4 PK 0 Shot 45 GI 11	(市場)	8 0 7 0 0 0	(栄光)(相手)
(未吉)	GK 3 GK 30 FK 0 PK 0 Shot 18 GI 4	GK 3 GK 0 FK 0 PK 0 Shot 0 GI 0	7 2 2 1	32 2 16 0 0 2 1 1
(栄光)	GK 12 GK 2 FK 23 PK 0 Shot 11 GI 0	(浦島)	12 0 6 0 0 1 1 1	苏田代田大泉
(未吉)	GK 0 GK 6 FK 3 PK 30 Shot 11 GI 4	GK 0 GK 0 FK 0 PK 0 Shot 0 GI 0	7 2 2 1	32 2 16 0 0 2 1 1

県下中学校トーナメント組合せ

優勝 片瀬中学 二位 栄光学園



掃除

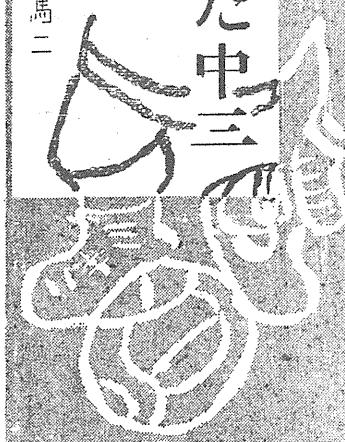
七月二十七日中学生街宣の、片瀬中学との練習試合のときのこととだ片瀬の先生が「栄光は洗練されていません」とおっしゃった。そこであります。試合を終つて着脱も終つた後等中三は洗練されたところを見せて、いこうじやないかというわけである。試合を終つてうれしくてしようがない中三のモサ運さき丁寧に掃除をしてきたことだらう。部屋の掃除となるとなかなかやめなくてせに――。



試練に打ち勝った中三

四期生

白水頭鶴二



昨年中学が優勝した時、僕がふと思つた事は「来年も」だった。
——一体何を健闘しようとしているのだろう。

合宿の最終日七月二十六日は朝。明日は試合（対立農中学）であるから激しい雨だつた。この悪天候。コンビをやるのだがバスが通らと合宿も遂に終つたという気持は僕在不活発にしてしまつた。しかしんな事にはお構いなしに彼等（中三）は部室に飛び込んでくるもいかぬ。ゴール前にボールが上

。雨の中をドシャ／＼七二回ばかり走る。もっと走るうと思つても足の豆はどうしてもそうさせながら。

（中三）は部室に飛び込んでくるもいかぬ。ゴール前にボールが上。雨の中をドシャ／＼七二回ばかり走る。もっと走るうと思つても足の豆はどうしてもそうさせない。昨日「豆なんか痛いと思うから痛いんだー」と威張つてみせた自分が恥しい。

「これか——今度は……」
僕の決心は極度にぐらついてしまつた。そして二学期中何か落着かない毎日を送らねばならなかつた。

皆真剣な顔している。髪の毛は入部したばかりの中一はかつて前いたれ、全身クシヨリぬれている。この雨の中を自然のようなく通り粒ごそろつていて将乗性

に富んだのがいた。こいつは僕には大きいなる魅力であつたが故にそれが僕を中二から遠ざけてしまつた。「こいつらを最初からガツチリ仕込んだらどんなにうまくなるだろう」こうした若えは増え僕を中心一に引きつけた。そして一時は完全に中一に踏みつて練習したこともあつた。その時中二の誰方が僕にこう云つたのを今でも覚えてゐる。

「今日は僕達とやらないのですか」

僕はその時ハクトして彼を見た。自分が恥しかつた。一体どうした事が。君達とやると中二の前でさえ言つたのに。順序がある。来年の中学校チームはこの中二である。それがはつきり分つていたのであつたが。

迷はそれだけではなかつた。中三のつまらなそうな練習がそれだつた。彼等とは僕の高三の頃から長い交わりがあつた。そして練習の苦しさも勝利の喜びもお互に分ち合つた友達だつた。その彼等が日々に「この頃の練習はつまらない」と訴える。

「まあ君達は僕の手には負えない程上達したんだから他の人にやつてもらえよ」とこんなでまかせ

に見えて活気のなくなつていく彼等中三をみせつけられては、彼等の将来がどんなに素晴らしいだろうとの夢も日に日に消え行くのをどうする事も出来なかつた。ことに

二学期中、ふとーーと定まらぬ状態が続いた。しかし冬休みの強化練習はこの状態に決定的な終止符を打つてくれた。

この練習は今でも中三の語り草であるが、極めて激しい練習だった。前後八回のタッシュ入りのランニングは僕もひどくつらかつた。

つては僕も黙つてゐるわけにも行かないなつた。「もう一度中三とやろうか」と思つた事もしばしばだつた。確かにそれは僕にとつて樂方のいき方だつた。何故ならその頃になつても中二がなかなかうまく行かなかつたからだつた。彼等との練習に樂しさというものをほど感じなかつたし、希望も極めてアライマイなものだつた。不気嫌に中二を怒鳴つたし、軽べつの言葉をえ隠さなかつた。

この練習はサッカーをやり続ける意志のある者とない者とではつきり区別してくれた。もうこの時は中一も中三も観なかつた。「」の邊から楽しい思い出が始まる。練習が終つて帰る頃には外はもう真暗、何が出るか解らぬ……。突然校門から飛び出たチンピラ達。捕えられた僕と同僚は赤いチョウチンの前に立たされる。アンと鼻をつくタイ焼きの香……。そして解放。

るものを見伸ばせるだけ伸ばすのみだ。練習・練習。

その頃中一がかなり技術的に腰近して来たのには僕もあせった。

「なんだ中一なんか。」そう思つては見たものの、試合を申し込まれると、「もし、中一と引分けるような腰戦だつたらしたらい。」と思ふと断らぬにはいられなかつた。中二には黙つていた。きつと「中一なんかやつづけてしまえ。」といつて容易に引込まなかつただろうし、僕も彼等に対する不信の念を口に出す勇気がなかつたからだ。

られなかつた。たゞ練習量の體であらうか全員技術的差が少なくなつた事、そしてかすかな希望を持てるようになつた事はこの練習の一応成功したことと在物語つていなさて、愈々大会が迫つてきた。先づ小手試しに藤沢一中と試合をする事になつた。体力もありキックもある一中は再三再四宗光を背かしたが一対〇で快勝した。

この試合に僕は練習の明らかに成果を見る事が出来た。又この調子だと相当行けるという確信も得る事が出来た。しかもそれ以上に今迄表われなかつたけれども大きくなふ点であつた「タッシュとアタック

ない収穫に僕は満足した。しかし他人技のまだあやふやなのにチ一ムとして練習をるのは何としても割り切れぬものを感じせずにはい

ク」が明瞭に出た事は大きな収穫だった。そしてそれは、大会第一回戦対赤吉中學との試合に於いて見事に矯正された。多くのキズと打

僕傷がそれを証明していた。増々好調に国府津中を破り、準決勝で市場中も破つた。そして優勝校片瀬中学も破つた。しかし二の最後の一戦は前の三試合とは全く違つた性質のものだつた。何故なら、その前には失望と動搖の一ヶ月があつたのだから。周知の如く決勝で棄权したのだ。

不満と落胆の一時期が過ぎると僕達のやる事はもう一度立ち上がる事しか残つていなかつた。逆境にあってこそ力を出すべきだ。それから脱却する事、以前よりも頑張つて次の目標に向う事これこそ為すべき事だつた。僕は既にタラケさせなかつた。そして彼等も徒にタラケていなかつた。

次の目標それは優勝チーム片瀬中学だつた。

「今日は練習試合だ。これに勝てば疑いもなく県下隨一だ。しかし選手権が薙い遣せるのでもなくいわんや、力ツフなど戻つて来ようはずがない。君達が全能力を発揮して戦えばそれでいい。

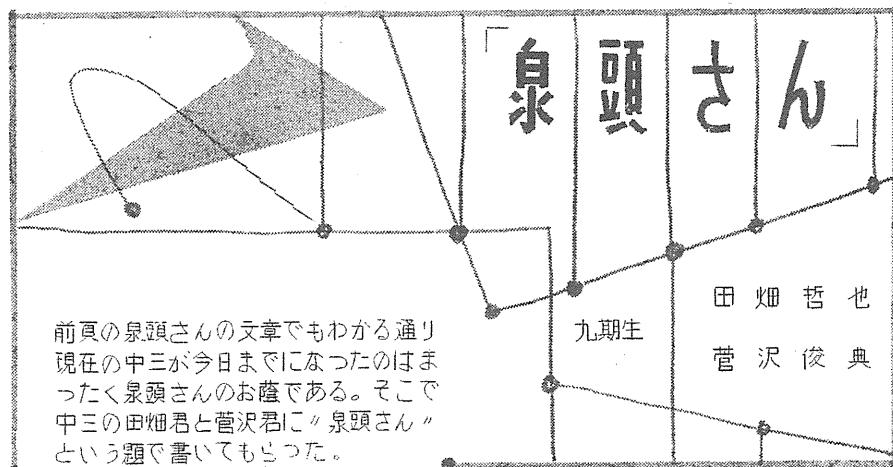
油断のならない攻防戦、差はわずか一点だ。もう一点と執拗にゴルに迫る栄光の奮斗ーホイツスル。勝つた。

応援に駆つけた東郷先生、上級生、先輩から「おめでとう」を言われ、彼等さすがに嬉しさを抑えられない。

彼等は何を征服しただらうか。確かに片瀬中学を破つた。しかしもう一つ征服した。自分達を征服した。逆境に打勝つたのだ。

戦い終つて身支度をしていた時、中三の誰かが「こう言つた。「カツ

アなんではない方が気持ちいいや。」彼等のこいつらの気持ちには確かに大会で優勝できなかつた残念の気持ちが感じられるが、それよりもっと純粹なものを僕は感ぜざるを得ない。



トクサンのこと

田畠 哲也

「トクサン」 泉頭さんの事を僕の知つてゐるトクサンの事について書くということは我々現中三の一周年の歴史を語るに等しいと思われる。以下僕達の試合の経過等も織りませて書いていこうと思う。

泉頭さんは当中二の我々を集めて言つた。まだ春も浅い二月の事であつた。山側のゴールのネットの裏であの中学校県大会の優勝力シスを前にして、「いいか、このカツバ絶対にとられるなよ、二年連続優勝するんだ。」

そこには二十八年六角橋中学校

角橋中学校と三つの石が結びつけられた。三十一年栄光学園中学校と結びつけられるのを夢みるごとく、去年の夏泉頭さんが指導した中三が見事六角橋を破つたのを想い出しているかのように、トクサンの顔は嬉しそうに、又ほこらしげにかがやいて見えた。

それから二カ月初の対校試合、対ゼント、ジョセフ、これが何と零対四、この大差を見ては我々をコートするトクサンならずとも、僕達の前途を暗黒と考えない者はなかつただろう。泉頭さんとしては「勇将の下に弱卒有り」の感を深くしたにちがいない。トクサンはあの優勝カツバをあの感激を僕達に持たせたかったのだろう。

春休みの練習は激しかつた。運

た。トラッセルあれはつらかつた。

他の学校のことも、試合のかけ引

張った。昼休みにも集つて練習し

何度もトクサンのどなり声が我々

の機会をおとされた。五月十八日

いよいよ中学校県大会が始った

もつと足をひいて」それに続く

対藤沢一中戦であった。我等は一

オ一戦は、六月十六日の対未吉戦

ヘンティンタ・フレイスキックド

対〇で勝つた。勝つことはかつた

であつた。この試合も大きな発展

ルブル、バス、ピンチキック、こ

がその内容は惨憺たるものだつ

た。押しに押され、こぼれ球は皆

ツ倒れそうになつた。午後からは

コンビネーション、ロビンタの、

とられ、タッシュもファイトもは

練習、そして高校との練習試合、

けれどもバテたのは我々の方だけ

ではない指導してくれているトク

サンも然りであつた。

最後の練習の日高校との練習試

合で僕等のかけまわつて いるのを見

えてトクサン曰く。

「君達は羨しいネエー。あれだ

け練習してもまだあんなに走れる

んだからナー。」

今まで自分達の実力も知らず、

シシュ」とこれに対して皆もよく頑

らいつた

飛躍台ともなつた。トクサンは試

合の後でこういつた。「タッシュ

とファイトの養成主導として県大

会までの残り少い練習日に練習し

よう。」それからの僕達の練習は

いかなのに、確かにあの春休みの

練習がきいていたのだろう。この

試合後トクサンのいわく。

「オレはな未吉を見た時これは敗

けると思つたんだ。奴等は大きか

ずトクサンから声がかかる「タ

つたからなー」ニヤ／＼笑いなが

第二戦、準決勝ともに衆賛した
いよいよ決勝進出かと思われた。
ところがその日は本曜日であった
ので棄权してしまったのである。
不運とあきらめる他はなかつた
。況んでいた僕達をある土旺曰ト
クサンがなぐさめてくれた。

「ウン、あの決勝棄权は奥に残
念だ、オレも口惜しくて仕方がな
かつた。又君達にとつては逆境と
もいえる程だつた。しかしここで
君達に考へてもう一回ことは決
してこの逆境に敗けてはいけない
といふことだ。これをたえしのん
で次の大きな逆境の時に打勝つ力
を得ようとするんだ。」あの春の
日、ネット裏のトクサンの顔が浮
んで消えた。

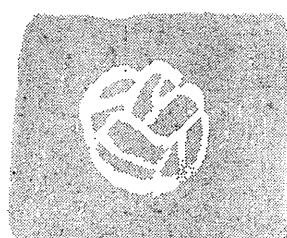
夏休みに入ると七月二十七日片
瀬と練習試合をすることになった
。程に下手だった僕達あの敗セント

片瀬は県大会の決勝で不戦勝した
。学校だ。皆奮んだとともにすばら
しいファイトをもつて練習にのぞ
んだ。雨の日ドロ／＼になりなが
ら皆一団となつてトクサンのコート
のものとに練習に励んだ。

正に天下分目ともいふうか、

県下の一、二を決める試合であつ
た。押されれば押し返し、押しか
えすと又押しかえられた。しかし
遂にタイムアウト勝つた。一対零
で勝つたのだ。実力で神奈川県一
位になれたのだ。藤沢一中の時と同
じスコアではあるが実力は雲
泥の差があつた。上級生、他の先
輩が喜んでくれた。特にトクサン

を握つたのである。



泉頭さん

菅沼俊典

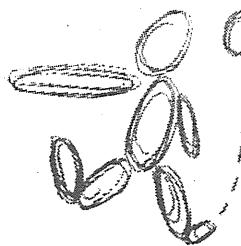
僕達中三が蹴球部に入部したのは二十九年の二学期であった。それから早いものでもう丸二年の月日が「アツ」という間に過ぎてしまった。入部当時はサッカーのサの字も知らなかつた僕達が、ひたすら巧くなるように練習した。そして今年三年になつて、一応試合に出られる程になつた。試合といふのは県下選手権大会である。この試合に於ては、準決勝まで順調に勝ち進んでいたが不幸にも決勝戦は棄权してしまつた。その時の僕等の口惜しさ、それ以上に僕

等を指導してくれた泉頭さんの口惜しさ、しがしそれをはねつけ、進むべき道を切り開いてくれたのも泉頭さんであつた。夏休みに入つてからも毎日の林に指導に来て下さり、又一緒にでも下さつた幸いにも七月も下旬、県下選手権で僕等と決勝戦で相まみえる相

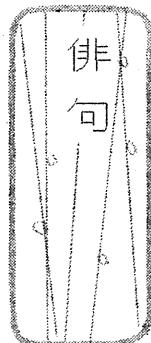
手であつた片瀬中学に遠征し東郷先生の御観戦の中で勝利を握るこ

とが出来た。その時レフエリーをやつた泉頭さんの胸中いかん?

この勝利も泉頭さんの指導以外の何物でもないのである。



文芸



朝もやや樹氷のかなたの銀の峰
雪原に二つ伸び行くスキーが立

山小屋に着きてとるなり肩の雪

雪傾在登るリフトは赤い色

夕やけに赤くそまるは伊豆の山

江ノ島の光も見える浜の夕

秋の浜青く光るは夜光虫

小野井街

つらがった練羽

市村後一

「サンカーレ」ほくの頭には
「つら」の言葉がある。中
一の二学期何もしらずにサ
ッカー部に入つて来た。あれから
もうじき一年、ほくはつらいしか
し楽しい練習や試合をした。この
作文を書いているといろいろなつ
らの練習を思い出す。また数多く
の楽しい練習も頭に浮んでくる。

東郷さんと佐々木さんのコーチ
で最初の練習をしたとき、あの時
はサッカーが面白くてこの部に入
つたことを心から喜び又ほこりに
思つた。

ほくたちは高三の人つまり、川
喜田さんなど七はほとんどもあ

う機会をもたなかつた。しかし、保
土ヶ谷の石田さんがサッカー部だ
とわかつたのでその日の帰り部の
ことをいろいろ聞いた。佐々木さ
んが花子さん・川喜田さんがチャ
ンピヨーというあだ名をもつてい
るといふことでもこの時ははじめてし
つた。

つらがった練習というと、この
石田さんのコーチのときと、栗原
さんの時のこと�이다.される。
石田さんに初めてコーチ(?)を
してもらつた時のことだ。球を蹴
ろうとしても、球がない。しかた
なく体力をつけようとする。ランニン
グをすることにした。及川、松田

佐藤、林とほくの五人、まずグラ
ンドから甲学校舎に行き、氣氛も古
い階段を、往復二回上つたり下つ
たりした。上りの時は足が自然に
動いたが、下りのときは足ががく
がくして、氣をつけないところび
そうだつた。それから校門までい
き、ついでにロードレースをする
ことにした。約一トンネルまで行
つた途中で林が「パンツがくつ
いて気持が悪い」といつたりした
。しかし、笑う声がない。みな

たゞ黙々とかけつけた。ラン
ドに帰つてきた時は体がのぼせて
真赤な顔をしていた。石田さんが
「みんなよくかけてくれた。だが蹴
球部なんだから球をわすれではだ
めだぞ。」といつた。その時は皆笑
つた。次の日ももの筋肉がいたく
てこまつたが、みんなの自慢の種

が一つ出来た。

次に栗原さんに指導してもらつたとき、あれほど「らか」たことはなかつた。十人ぐらい集つて、練習をはじめた。コーチは栗原さんと中村さんで我々バックスは栗原さんだつた。最初のランニングがいやに長い。それでも、サイドランドキックとみなフットを燃やしてやつた。次はヘッテンタ、今までの基礎的な弱いのは問題にならない。野球のバッターネットの前に立たされて、まわりから思いつきりなげる球をヘッドする。やるたびに頭がガーンとなる。「いくさっ」休むひまもなく声がかかる。一発、又一発、目にはいつの間にか涙がたまっている。悲壮な姿だ。「ファイト」という声など聞いていられない。次々にものす

「いい球が遠慮なくとんでくるの、だ
」「ピーシ、次フ」やつと終つた。
ほつとして一息ついた。みんな少
しだれてきた。そしたら「なにぐ
ずくしている！」といつてラン
ニンタ、栗原さんがかけはじめた
。みんなくたくたの体をゆすって
きるぞろつしていく。ヘッティン
グ一対一、ショーティングなどという
いろな練習も終り最後のランニン
タ、野速とサッカーのグランドを
まざて終るだろうと思つてもなか
か終らない。しまいには栗原さん
を憎みたくもなつた。目はくらく
らし、足はたゞ無意識で動く。「
ピーッ」といに笛がなつた、みな
声が出ない。いつもなじうるさく
でおこられることがあるんだが。

れ、むこうまでタッショ！」といつて笛をならした。百メートルを無我夢中で走った。「もう一回」と声がかかる。走る元気はもうない、重い棒の你な足を無理に動かして走った。終った時には体操をするのもおっくうでほんとに死にそうな気がした。栗原さんは「死にやしない」といて平気な顔をしていた。次の日来たのは七人だつた。休み時間に意外にも栗原さんが現われて、ボストンバッグから新聞紙にくるんだみかんをだしてぼくたちにわけてくれた。「きのうはみんな良く頑張った」とほめてもらいながらみなすきばらにみかんに舌づつみをうつた。つらいあとは楽しい。しかしこの練習は貴重な四時間だった。あとからの強い練習にもこの時のことを思いだせば平気である。これからも、もつともつと強い練習に体をきたえ、心をきこえて一日も早くリップスボックスマンになりたい。

中学生の作文。

卷之三十一

◆ここに掲げたのは中二になって我部に入ってきた前途有望な後輩達の観球部に対する感想文であります。夫々内容は似たりよつたりの簡単な文章でありますぶ、その反面夫々異った情熱をもつた、我部の経験に大きな期待を寄せ得るだけのファイトをもつた者が大せいいるということがこれらの文章によってはっきりわかると思います。---◆

いから汗が出ても我慢する。

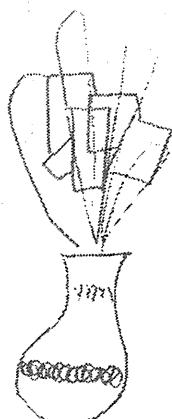
祖母はまだ僕がサッカーをやることに反対だがその中にきて賛成して貢成してもらえるようにつとめたい。

今までに一番うれしかったのは東日本大会の予選の対小田高の時前半一点入れられて、そのまま後半もあとはんの少しづか時間がなないのでだめかと思つていたら岩田さんがショートして同臭にした時だつた。あの時はみんなと一緒に上つてよろこんでいた。

もうすぐ一年生が入ってくるから一生懸命練習して早くその模範となれるような立派な部員に早くなりたい。

武 杉 宮

ぼくが蹴球部に入つたのは二年になつてからである。一年の三学期のある土曜日家に帰る途中蹴球の練習を見ていて急に入りたくなつた。それ以ま蹴球に興味を持ちはじめた。二年になつて最初の練習の日、部室がどこにあるのか知らなかつたので一人ボックンとグランドに行つてトレパンにはきかえた。タランドのキスみで一人の上級生が新しく入つたもの教えていたのでぼくもそこにと親切だった最初にサイドキックをおしえてもらつた。なかなかいいかない。でも一生懸命にやつたので少しはうまくいった。休み



一之 石 大

一年の二学期の

受け、サッカー部に入った。

という声が夕焼け空に広がる。

スポーツ大会の時に始めてサッカーというものをした確かあの時はインナーをやつたと思う。あの時はし、この対戦で市村君や林君にきれいに負けてしまった。

それまで僕は、サンカーというも

うがない。早く上級生のようにうまくけりたいと思つていて。僕はサッカー部に入り本当にやつたと思う。

二年になつて正式に入部する事が許されたとき僕は松田君にすみられたのと小学校五年の時にやつて興味覚えたのでサッカー部に入ることに決めた。しかし中學時代に陸上競技をやつていた父はあまりいい顔をしなかつた。母はサッカーのサの字も知らなかつたが許してくれた。それで父も勉強を忘れないならといって許してくれた。

のが、どういものか全然知らなかつた。それから僕はサッカーが好きで好きでたまなくなつた。校庭でくつの底のすりへるのもかまわず、テニスボールを首と一しょにけつて、サンカーのまねのようなことをして遊んだ。

ヒューリックとボールが青空に映えて遊び始めた。僕はガツチリ取つた。ガーン体中にひびいてくる。

四月から数えて四ヶ月近くこのボールを受け止めるのに苦しんだ。すぐにボールをフォワードに送る

。そして二年になつたらサッカー部に入ろうと約束をした。

。唯野君と二人、二年になつたらサッカー部に入ろうと約束をした。

。そして二年になつたらサッカー部に入ろうと約束をした。

その4 唯野英暉



西高を観て

七期生 佐々木民雄



今年の東日本大会は残念ながら一回戦で敗退してしまったが、その翌日僕達七人は二回戦の浦和西高対福島工高の試合を見た。結果は五対〇で浦和西の圧勝ではあったがこんなに印象に残り又見応えのあつた試合ははじめてだった。以前にオリンピック極東予選の韓国対日本の試合や、アメリカオリンピックチーム対日本の試合を又東京の大学リーグ戦等も見たがそれ等以上に印象的な試合だった。これは見る目が肥えてきたからだろう。何故そんなに印象に残つたのか。それはエーに彼等の試合態度のきれいな事だ。エニは彼等の走力とダッシュ、ターニングである。エニは試合中疲れを知らずに走りまわる体力である。エニの試合態度がきれいであるといふのは唯反則をしないといふのではなく物凄いファイトと勝とうという意欲がみなぎつているということである。所謂スポーツマンシップに乗つとつてしているとい

うことである。全く見ていて気持ちがよかつた。栄光にはこの物凄いファイトというもののが不足していると思った。反則をしないということだが反則をするのは下手なチームに限つている様だ。この点で後の堺崎対宇都宮を見て、がつかりした。エニの彼等のランニング等であるが栄光の様に走り方が各人各様でなく皆同じ走り方であつた。そしてそれが非常に小股なのだ。一寸表現しにくいが強いていえば足をあまり上げない走りで後にも蹴り上げないので上体が少々前かがみ気味の垂直になる。丁度先輩の穎原さんや又、メジロさんがもつと腰を落したような走り方だ。それからまたダッシュが、それらの小股から生ずる鋭いターニングが僕達を最も驚嘆せしめたものだ。感心したり驚いたりばかりしている様だがこれには本当に驚いた。これも見なければわからなく表現しにくいが穎原さんのターニングをもつと早くしたものだと思えばよいだろう。肩と腰からグッと転換するのだ。このターニングが実際に試合中使用された。僕の見たのはCFの辺で彼は福島ゴール前での鋭いターニングで相手バック三人をほんとうしていた。

以上の要素に力強いペスワーカ特に山田村とF过大のコンビ、田村の突込み、それに両インナーのフオローとキアテン山田本の好フィードが相俟つてこれ

ムと機会があつたら是非練習試合をやりたいと思っている。この様な経験を生かして少しずつでも我々の練習に改良を加えて行くつもりだ。

また物凄い攻撃をかもしだしていた。そのファイトと意欲は前半六点いれたにもかゝわらず後半九点も入れた事にも表われていれば、十点入った時に「西高コレカラタダゾ！」という声にもその一端が見える。又あつけにヒラれたフレーだが仰の辻がゴール前へドリブルで強引に割り込んだ時福島のバンクに殆ど決定的と思われるスライディングタックルされたがそれを自分で倒れて腹にかかえ込みそれをショートしてしまつたことだ。その攻撃の物凄さはタイムアッフルの笛が鳴った時福島工の跳びがゴールの中で、バツタリ

「」の試合を見ていて直ぐタラソードにとび出して彼等に交つて試合をやりたい衝動にかられた。僕は大

いに練習意欲が湧いてきた。一緒に見ていた他の人の友もそうだったに違いない。部員全部に見せたかったチームだった。西高は昨日の東日本、今年の全日本、東日本と優勝したわけだが、「ういうチー

レーに接する機会の多いところでは「百聞は一見に一
かず」のたとえ通りである」とあつたがこの意味が
わかつてきた。秋から冬にかけて大学のリーグ戦が
あるが、日旺日専を利用してこういう試合を見る事
を大いに推める。

とにかく好試合の観戦ということが練習程に大切
であるという事をもう一度いつておく。

竹脇重丸著の「サッカー」のはしがきに「イギリスのあるサッカーの解説書に『サッカーがどうなものであるかを知るには、高級なゲームを実際見て、試験を積み、そのうえで不足なところをこの本で補え』と書いてあつたのを記おくしているが、イギリスでは理論より実験を重んじてはいるがに見えふ。複雑なチーム、ワークを文字で表すのはむずかしいことでもあり、普及してぶりかつ強いチームのアレーに接する機会の多いところでは、『百聞は一見にしかず』のたとえ通りである」とあつたがこの意味がわかつてきた。秋から冬にかけて大学のリーグ戦があるが、日晤日善を利用してこういう試合を見る事を大いに推める。

丹沢に於ける高二部員

七期生

金沢 洋

八月九日午前七時、高二約二〇名東郷先生や各先生が大船駅前に集合し、貸切りバスで、表毛まで行つた。蹴球部では佐々木主将以下伊橋・小川・奥田・青木・東郷・金沢の七名が今度のキャンプに参加した。九時に徒步で表毛を出発、十時すぎヤビツ峠・十時半には

千長さ六、七メートルもある大木もあつた。四時頃から飯合炊さんをした。皆去年の経験を生かして、黒ニヂの飯はあまり見られなかつた。夜は翌日、塔ヶ岳から、丹沢山・三ツ峰へ行くというので八時半頃就寝した。

翌日は五時半頃起床。天気はあまりよくないが、雨はふりそうもないので十二時頃札ない。朝飯は炊事当番の作つたみそ汁とごくわん、海苔のつくだ煮だつた。昼飯のため飯合に半分ほどんきのこしど、三人に一つづつ缶詰の配給があつて八時山小屋を出発して塔ヶ岳に向かつた。蹴球部員では奥田が風邪のためチンドン（山小屋にのこつて）いること（余キロ）の予定は九時前といつた。大きいものには直徑十センチ長さ六、七メートルもある大木もあつた。四時頃から飯合炊さんをした。皆去年の経験を生かして、黒ニヂの飯はあまり見られなかつた。夜は翌日、塔ヶ岳から、丹沢山・三ツ峰へ行くというので八時半頃就寝した。

翌日は五時半頃起床。天気はあまりよくないが、雨はふりそうもないので十二時頃札ない。朝飯は炊事当番の作つたみそ汁とごくわん、海苔のつくだ煮だつた。昼飯のため飯合に半分ほどんきのこしど、三人に一つづつ缶詰の配給があつて八時山小屋を出発して塔ヶ岳に向かつた。蹴球部員では奥田が風邪のためチンドン（山小屋にのこつて）いること（余キロ）の予定は九時前といつた。大きいものには直徑十センチ長さ六、七メートルもある大木もあつた。四時頃から飯合炊さんをした。皆去年の経験を生かして、黒ニヂの飯はあまり見られなかつた。夜は翌日、塔ヶ岳から、丹沢山・三ツ峰へ行くというので八時半頃就寝した。

チーマワーグよく佐々木・青木・金沢・東郷・小川・伊橋と前の方に順序よく並んで元気な登頂した。頂上は非常に涼しかつたが、い

われていど、頂上の山小屋でお茶を下つてまことに五〇メートルぐらい登ると、降りてさほど足にあまり自信のないもの二〇数人はひき返し、勿論足に自信のある蹴躰部員六人は全コース行くことをちかつて、友お二の塔ヶ岳の高さは一四九一メートルである。

十一時四十分頃塔ヶ岳を出発して丹沢に向かつたが六人は順番をかえるとペースがくくれるなどといつて前と同じ順序で歩いた。しかし塔ヶ岳からのコースは下りもあるので却つて塔ヶ岳の上りより樂なくらいであつた。十二時二十分一五六七メートルの丹沢山頂に達した。そこを昼食をとつて、朝飯の残りと鯛肉の大和煮の缶詰をつむが、非常によまかつた。十五分程休んですぐ出発した。

丹沢山から一気口三〇〇メートル

下りてさほど足に自信のないもの二〇人ほどと、二つの峰のエングアンホの頭にさしかかるところもあり、二つ目の峰のエングアンホの頭にさしかかるときは立札の間違いでそこがタレイの頭であるという天狗さんの話にみんなやうがうがり丹沢山から二時間半、塩水川に出るまでは水がないので水筒の水も僕約して一回に一口だけ呑つた。天候はいつもよくならず、相

變らずあたり一面は濃い霧におわれ、遠くの方には雷鳴さえ聞え分一五六七メートルの丹沢山頂に達した。そこを昼食をとつて、朝飯の残りと鯛肉の大和煮の缶詰をつむが、非常によまかつた。十五分程休んですぐ出発した。

丹沢山から一気口三〇〇メートル下りてさほど足に自信のないもの二〇人ほどと、二つの峰のエングアンホの頭にさしかかるところもあり、二つ目の峰のエングアンホの頭にさしかかるときは立札の間違いでそこがタレイの頭であるという天狗さんの話にみんなやうがうがり丹沢山から二時間半、塩水川に出るまでは水がないので水筒の水も僕約して一回に一口だけ呑つた。天候はいつもよくならず、相變らずあたり一面は濃い霧におわれ、遠くの方には雷鳴さえ聞え分一五六七メートルの丹沢山頂に達した。そこを昼食をとつて、朝飯の残りと鯛肉の大和煮の缶詰をつむが、非常によまかつた。十五分程休んですぐ出発した。

東郷もついていつた。他の蹴球部員たちは知らなかつたと見えついで二度ハツト。始めのうちはそれ程急がなかつたが、第一のトンネルの前で山小屋の番人の山岳部のBオリトさんが夕食の仕度のためかかげて僕達をぬいていつた頃から、そろそろとほし始め、青木は長いスネにまがせてぼりくと甘肃の東郷と僕はついて行く。

去年東郷がこの辺にきたといふの
をたよりにまだか（）と聞い立
がら歩い立がその道の長いこと、
まことに同じよう立まがりかどがいく
つもあつてだんだんあきてモモ。
その時「もう二位とは相当差が開
いたろう」と言いながらひよいと
うしろをみるとすぐうしろに二・三

発電所へといつても貧弱なもので、ガードが見えた。その時間に、さつとくちがう。反とと言ひあつて、いだが近くまで行つてみるとやはりオリトさんだつた。坂こうとするとオリトさんも負けじとがん張るのでニニこまかに競争となつた。こんどことをしゑがら歩いてきたので予定より三〇分ぐらはやく

へつりてきこいる。途端又急に速度がました。青木があの長い足で急心の足から二つちはまらないまるで駆けている林だつた。そのうちどうにか二人をふりおとしへが、まだくそにから小屋まで十分という目標の発電所がみつからない。途中ニ匹のがマガエルも五回にかゝつた。そのうちやつと発電所へといつても貧弱なものだ

四時半頃山小屋につりた。夕飯の
めしはもう疋けていた。その晩も
つかれているというので早くねだ
三日目の朝あがると陽がかんか
ん照つて青空がみえていて、とて
もすが／＼しい天氣だと思つてい
たが、八時頃には天氣は一変、雨
がふりだして沢登りは中止と
なり一日中チンドンということに
なつた。

皆適当に工本をもちより眞珠部員まとまつてトランプ大會をひらいた。ペーディンに始まり五十一名差し、うすのろ・ダウト・ボーカーとあらゆるものをやつて午前中をすごした。名差しのときには先生の名前をつけたので時々「東郷覧」「宇佐美清夫!」などと弋るるので、先生方はびっくりされたり。名差してはイツバ千が二

回ともビリになつた。またうすの
ろでは、反んと佐々木主将がみご
とうすのろまぬけといふことによ
つた。

まだその日の夜、広間の片すみ
で何だかさわいでいるので行つて
みると、元部員のオットンが何が
すこくむづかしい手品をやつてい
るところだつた。心理学と積分
を使う手品」と称する手品で、後
まわいていて、誰かのふれをカ一
ドをすばりあてるというものが
だ。ところがそれが不思議なこと
に何度やつても全然外れないで
ある・黒山の人たがりの中のオッ
トンは平氣で何度もやつて見せて
いる・だがががこれは、さくら、
びろうと言い出しだが、まわりを
見まわすと誰ひとりさくららしい
と思われる者は反かつた。

その時、やにわに青木が「おれも
その手品ようできるぞ」とのり出
してきてので皆、「じやあ青木やつ
てみろ」とやうしてみると、これ
まで見事なもの二三度やつてもビ
タリ、これにどうやら桜だらうと
いう事はやんてしまつた。まわり
の見物人はだい不思議の目をみは
るばかり。そのうちに近藤（中三
部員近藤君の兄貴）（雪男）が、
「おれにどつてできるぞ」とやつ
てみたが見事大失敗。みんな大笑
いした。次に東郷がやつてみると
東郷もさきだまを奥々僕も種を
しつているというので結局、蹴球
部の奴があやしい・蹴球部の中に
さくらがいるとみんなさわぎだし
てので、二の手品がさくらであつ
たといふことだけは覚えてしまつ
た。しかし、そのさくらのやり方は
まだ蹴球部員しがしらぬことで
ある・二の夜は二時間にわたつて
してきてので皆、「じやあ青木やつ
てみろ」とやうしてみると、これ
さには感心した……この夜以後
蹴球部はさくらだ、ということ
にされてしまつた。

四日目は天氣が割合良くなんで
イシヨンも良かつたのでヤゲン沢
をつめることになつた。しかし
四日目は天氣が割合良くなんで
イシヨンも良かつたのでヤゲン沢
をつめることになつた。しかし
じたのが参加者は約半分の二十ヒ
人だつた。しかし僕達蹴球部員は
七人そろつて参加した。二の二十
七人を三組にわけ一組のリーダー
には天狗さん二組には山岳部OB
黒山さん、三組にはオリ戸さんが
ついた。蹴球部の七人は一組に入
り、山小屋の下を流れる川の上流

ら尽りようこみんゑわらじをはり
た・沢をのぼり出すと・小川の流
れる石から石へ時に滝をのぼつ
てじりくと川の上流に向かつて、
戸が意外なことに先々日の塔ヶ岳
の時にくらべ疲れ反りばかりが兴
味・スリル共に万葉で丹沢にきて
という感じまた山のぼりという感
じがしみじみと味わえた・滝はF
—F2と全部でハツあつ左が
F5のとき始めてザイルをつがつ
て。はじめ天狗さんが滝の上まで
上つて、上からザイルをゑげる、
その輪をスッポリかぶつて着をよ
じのぼる、その時こそ本当にスリ
ル万束であつた。上流に行くにし
てがつてだんく川幅がせまく重
つてきこつには水が全くゑくゑ
つてしまつた。途中“煙突”とい
つて、両側を前にはさまれた幅一

米もゑいくらいのせまいところを
よじのぼつたがその時もスリルを
味わつた。また表尾根にてる間ぎ
ろもあつた。その時は蹴球部のみ
人ゑはトラックの練習だ・ヘンデ
インクしちやえ・イツバチはスラ
イディングレラなどとはしやいで
榆木だつた・表尾根へ出走頃には
また天気が悪くなつて雲が一ぱい
だつたが・非常にすゞしくて気持
よかつた。何にしろすべての裏に
於いて沢登りは先々日の三ヶ峰続
走にくらべ面白がつた・沢登りに
ニゑがつたやつは本当に馬鹿だ反
対して、西側を前にはさまれた幅一

ここゑかつたので「遠足の時に十
分このつぐなりをするよ」と高つ
てい左・帰りはヤビツ峠の下の林
道にござが、そこから自由に帰つ
てよいということになつたので、
まだ例の如く青木がすつとばし、
今度は歩くのではなくてついにか
け出しだ。オフは意地で青木につ
けて行き結局札掛まで二人で全部
かけてしまつたそつた。よくもど
んなにファイトがあつたものだ。
東郷と僕は・氷砂糖を口に入れ、
水をのみ反がらスラスラと帰つた、
僕達がついたときには青木はもう
一あびしがえつてきとところだ
あとみんゑで話し合つた。昼食は
と人円くゑつて小高い山の上で食
べた・みな一個ずつ缶詰をもして
みんなにまわし非常に豪華な昼食
だつた・モヤシオクは缶詰を持つ

この夜は恒例の工木大会だつた
蹴球部は何かとつぱなものをやつ
てやろうといふく計画をたどつた。
たとえば蹴球オトリ(青木衆)

先生のあだ名入り文章 オク案

第五日自はヒ時起床・朝食の時

定だつたが時間があるので歩いこ

その他おはす・才劇等・しかし、結局どれも未完成に終つた。

エネ大会の時麻球部として何が

やろうとしたが歌はどうもあまり

うまくない。しかし皆知つている

歌なんうというのであまりとび入り

の出なくなりつた頃、いまより「蹴

球部・歌をうぢります」と呼ばわ

つて大声はり上げて、箱根の山へ

をやらかしエネ大会に景気をつけ

やんやの相手をあひた。これに、

氣をよくして今度は、合宿のとき

メジロさんと栗原さんのやつた

「いいゑ、いいゑ、おねえさんと

いつしよ!」をやつたが今度は見

事に失敗し大恥じをかいてしまつ

た・まわりから「さくら・さくら・

五やれという声がかかるつてい三の

にはびつくりした。

には昼食の分まで一緒にモベてし
まつた。朝食後薪の整理、河原の

整理、広間の掃除などをして十時

十五分山小屋をはなれ、しかし

十一時五五分寝毛発のバスにのる

ためにみを急ぎ足、と二方が例に

よつて青不がまだとはしだし、

十一時五五分のバスにのろうとい

うものは十五人あまり、だが青木

にみんはつりていけず、またつこ

うとせす、青木は他の三人ととん

僕その他三人はそれよりやゝおく

れて歩いた。ヤビツ峠に出るまで

の近道は非常に苦しかつたが一見

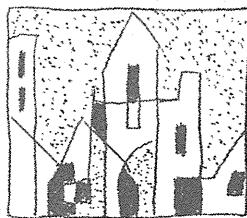
に上つてしまつたのであまりつか

れなかつた。瀬戸までは三〇分

ヤビツ峠まで五五分を行つてしま

つた・ヤビツ峠からかけありるよ

おり互に下におりて見ると青木と他の二人が休憩所で休んでいた。
早速僕達もそこでアイスクリーム
を食べて汗をふいた。青木にタイ
ムをきりてみると一時間五分ほどそ
うだ。天狗さんが一時間十分ほどそ
うだから新記録樹立といふことに
なる! 青木は二人互に速くかけさせることにしてよう!
られることがわかつた。今度から
練習の時には青木には二三回多く
反お僕達は一時間十五分だつた。
また僕達のあと練習中は一時間三
〇分だつた。しかしバス代もつ
ている宇佐美先生がおどり五あ
思つてゐるところと二人と広い道から
ラックに生徒二〇人と広い道から
二階半頃口ひつてまわつた。お佐々木生将にあつたとつた。
どは普提をまわつた。二階半頃はあつたといつての向まつて家の中から
下界はあつたといつての向まつて家の中から
行き立つてまわつた。大キマジンがもうう
船(金沢)でアツト中青木度がはりあはとつた。
とを附けておく凡ての金沢記



小田原高校訪問記

七期生 奥田義規

三月二十六日火 春休みの練習の締めくくりとして新人戦に黒矢戸で優勝した宿敵小田原高校と練習試合をすることに至つた。列車が余り混んだので予定の列車に乗ることが出来ず小田原に着いたときには一時近かつて、腹がへつては戦が出来ぬ、ともかく城趾公園でホコリをかぶつて弁当をとり静かな山中にある小田原高校に乗り込んだ時は一時半を過ぎてから、そこまでは丁度合宿中で皆昼寝をしていたらしく僕達が着換を終る頃にねむぞう反目をこすりながら皆起きてきた。合宿している部屋をのそくと長椅子を二つならべその上に疊をひいてふとんをひいた特製ベッド?が並んでいた。黒板には一日の時間割が書いてあつたが、それによると練習時間は栄光よりも短く、その代り研究という時間が大分あることに気がついた。この日の試合はフォワードの生駒・東郷と主力が抜けたが得失点が薄くなり結局零対二で敗けたが

相手小田原もさして強いとは思われなかつた。コーチとして小田原高校から中央大学にいき昨年のメルボルンへ日本代表としていった内野が来ていた。小田高の先生のお話をと彼の指導がきついのでもう皆相当まじつているそうだ。この素晴らしいコーチも頗る力強い、それもやつと来てくれたのだと、もう一回の如のように自分から来てくれるということをどういらいらしい。いくら技術的に立派なコーチでもこん反ことではいい。又もう一つうらやましく思つたことはボールがほとんど一人に一個の割合であるということだ。この学校のように伝統のある学校だと先輩の数も栄光なんかよりもずっと多いらしい経済的にも大へん恵まれてる林子だった。ちなみに先生から聞いた合宿の費用について見ると自己負担が確か三百五十円とがて後は一口五百円の割で先輩から寄附をつけるのをどうだ、これを聞いた頬原さん「ウワー、まあねエー！」

この他いろいろ面白い話を聞いて五時近く小田原高校のゲット帽ろくのそなわつた校門をここ坂を下り夕暗迫る中を小田原駅に向つ左。今日敗けたということもさして氣にならなかつた。

上智大学との親善試合

六月十五日土曜日上智に招かれてわれわれはさつそとタクシーで乗りつけ、上智会館の立派なのに驚き東日本大会に出られればここで泊れるのだと胸をふくらます、三時五十分上智キックオフで試合開始。

ます予想通り押しまくられ永島さんとハーフガラの中距離シュートがビシビシ来る、これがかえつて栄光に幸いしたのが知れま

い、上智は栄光を甘く見だようである、十分、十三分と左こつりけネットを搖さる、しかしさすが大學だけあつてすぐにコーナーをさめて前半二丸一となる。後半上智はニリもせずがちよつとメンバーを落しをようだ、しかし高校に破れては大學の名折れと反撃に本腰を入れ始め、又もコーナーを衆められ、元来栄光はコーナーに弱い、相手の時の一喫もコナードからだつて記憶している、これに対する対策を考えなければいつか命取りになるよう左気がする、これで二対二となり試合は辰

一分主騎の素晴しさをみて一更試合を栄光のペースで進め即ち二のまま押し切りだ。

試合終了後あるものは先輩の林さんには案内されて、暗い妙瓦シマワーホームに行つた、後の者は上智蹴球部通いつけの風呂屋に行き、向やう食べて秉もうしり、ヨウト組の方は上智会館の食堂でふつらよう十円ばかり安ソフトを食べる、さて東郷先生の御旅館もいつになく良い、曰く、「大体大學のサクヤンと云うものが一部はすこいんだが二部なんて走りしたことはないよ。栄光が勝つのが当たり前さ」とすこい畢竟、東郷先生ならずとも東日本大会への希望と期待で胸は高まつていた。

六時から上智会館で夕食を御馳走になる、内容はメンチボトルに

マカロニサラダ、魚のフライなどであつた。これが六十円のランチで食後のジュースは三十円であつた。味はよいが量が少ないので王に傷。それでも皆満足感。校歌を歌つたり、上習の人の宣伝を聞いたりしてヒ時半近く上習を後にした。

対石神井の練習試合

東日本大会で破れてから国体への足がかりを作るために東京の石神井高校と練習試合を県営を行つた。この時のメンバーは次の通りである。

藤伯塙田藤木美川木沢柳駒谷街
伊佐篠奥加佐早小青金東生塙井
G K F B H B F W
ブランドに出るとすばらしい緑の

芝生が生えているので試合前の練習は皆悪切リシュー・ティングなどはビシビシきまつた。主将佐々木あまして、セイヴィングとしてヘディングするという悪切リ方である。それに対し敵のシュー・ティングはおどまつてものであつた。この日め栄光はすつがり気が抜けてしまつた。試合が始まると予想通り栄光が押しきがどうしきことが得点に入らまい。そのうち一点入りニ点入りで、前半三点も取られてしまつた。ハーフタイムの時後半四点入れよう反どと云つてがファイントがわからず、唯暑さでバテてしまつて、後半最後までもつかもだ反いかを心配するやつもいだほどだつた。後半さらに一球を加えられもはや息の根を止められるようなる。

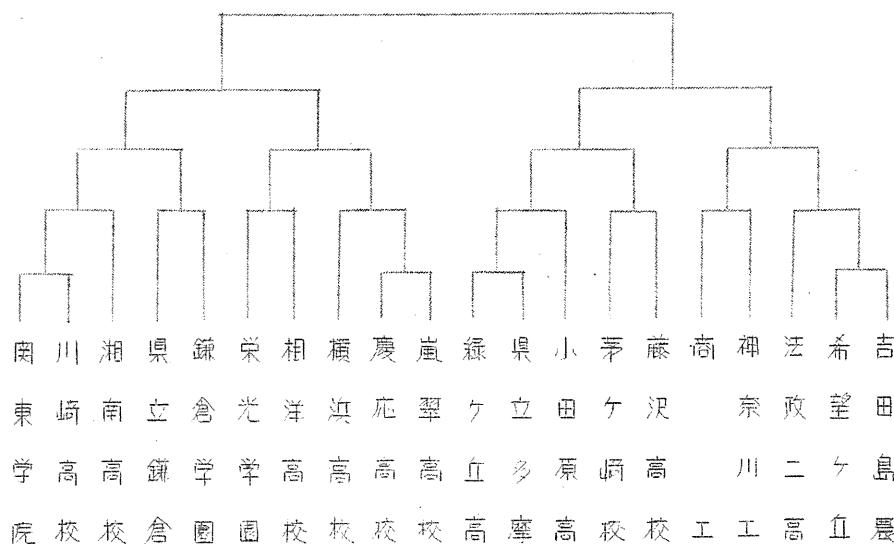
芝生が生えているので試合前の練習は皆悪切リシュー・ティングなどはビシビシきまつた。主将佐々木あまして、セイヴィングとしてヘディングするという悪切リ方である。それに対し敵のシュー・ティングはおどまつてものであつた。この日め栄光はすつがり気が抜けてしまつた。試合が始まると予想通り栄光が押しきがどうしきことが得点に入らまい。そのうち一点入りニ点入りで、前半三点も取られてしまつた。ハーフタイムの時後半四点入れよう反どと云つてがファイントがわからず、唯暑さでバテてしまつて、後半最後までもつかもだ反いかを心配するやつもいだほどだつた。後半さらに一球を加えられもはや息の根を止められるようなる。

さえ足首を負傷してゴール前に立ちすくみ、来る来る球みんな蹴り返していまが、片足だけしかスパイクをはいていないので球がみ

ちすくみ、来る来る球みんな蹴り返していまが、片足だけしかスパイクをはいていないので球がみ

らのもの、バツフは守るのに勢いつぱいで中盤はみまとられてしまう。いの所は一つもなく回対○で破れてしまつた。反省会は静かに県営の建物の前の芝生の上で行なわれた。しかし反省会といつても、静けさに鳴くヒカラシに聞きほれ風流を楽しむ始末であつた。帰り道皆の顔は決して負けたときの顔ではなかつた。(ヒ期生青木記)

国体県予選組合せ 八月二十日～二十五日



まだじやじめとしむ極

名句



サツカ一
交響樂團

(二人とも高二のくせに) もう既に般若先生の高一の
AとEは墨のねりつけたし
送別会に全員で出席した
ている。これを見ていける。
三のEさん、一丸兄弟風を
吹かせて、「向た、お前達は
高二にも戻つて」と怒鳴り
つけておいてその筆を奪う
と今度はOの物理のノート
さとり上でサラサラサラと
書きつづることが何と――
――ナサケナヤ

トヨタの上に井川サカヰ江に
カリカして最後に田紀伊源
輔をの上に二とが回る。一
ナサケナヤ
叶道の聲かおはせ
とひじゆけた
一某
トヨタの上に
ナサケナヤ
叶道の聲かおはせ
とひじゆけた
一某

各校との対戦成績

その1 — 高等学校

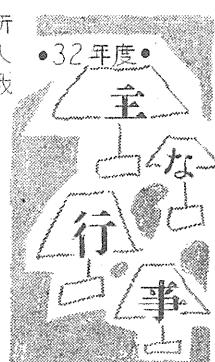
相手校	勝	敗	引き	得点	失点	備考
鎌倉学園	7	4	1	30	24	1954.6.12以 来現在まで7連勝
茅ヶ崎高	7	0	1	29	8	無敗
希望丘	4	3	0	23	21	
藤沢高	4	2	0	18	8	1952.11.3 以来現在まで4連勝
翠嵐高	4	2	0	19	8	勝った試合は全部4対0
川崎高	4	0	0	14	0	無敗、無失点
小田原高	4	1	0	13	2	
神奈川商	3	2	0	11	8	
相模原高	3	0	1	9	3	無敗
横浜高	2	2	0	13	10	
湘南高	2	2	0	12	5	無敗
セントジョセフ	1	1	1	4	11	
	1	4	1	6	14	唯一の敗越し校
	1	0	1	7	4	

その2 — 中学校

相手校	勝	敗	引き	得点	失点	備考
関東学院	4	0	1	14	2	無敗
鎌倉学園	6	1	3	23	6	引分けをはさんで6連勝
藤沢一中	4	0	3	12	3	無敗
六角橋中	3	3	0	8	8	
三崎中	4	0	0	12	1	無敗 毎試合4点をかくとく
千代中	2	1	0	1	2	抽選勝二回
セントジョセフ	1	2	0	4	8	
大和中	2	0	0	8	1	無敗
島浦中	2	0	0	9	1	
白石中	2	1	0	4	1	不戦敗一を含む
片瀬中	2	1	0	5	0	" " 、無失点
赤羽中	2	0	0	7	0	無敗 無失点

(二回以上試合をしたことのあるチームのみ)

| 県下高校地区別 | 月日 | 対戦日 | 高3新入生観迎試合 | 対戦日 | 高3送別会 | 対戦日 | 高3卒業式 |
|---------|--------|--------|-----------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 五月三日 | 04月19日 | 05月11日 | 04月11日 | 05月11日 |
| 五月三日 | 04月19日 | 05月11日 | 04月11日 | 05月11日 |
| 五月三日 | 04月19日 | 05月11日 | 04月11日 | 05月11日 |
| 五月三日 | 04月19日 | 05月11日 | 04月11日 | 05月11日 |



上智大学との一回戦親善試合
西日本プロックで二位という成績にとどまる

県下中学校選手権
六月十六日(～)二十五日
栄光 3-1-0 未吉
栄光 4-1-1 潘島
栄光 4-1-0 市場
決勝東京という不運でまたも二位と涙をのんだ

東日本高校サッカー選手権
神奈川県予選
七月十四日(～)七月十六日
栄光 1-1-1 小田原
栄光 5-1-0 藤沢

見事優勝し本大会二年連続出場なる。

高校夏季合宿
七月二十一日より二十六日まで

七月二十七日 於片瀬
栄光 2-1-0 吉田島
栄光 0-1-1 相洋
七月二十七日 於本校
栄光 5-1-0 鎌倉
東日本高校サッカーリーグ大会に参加
七月二十九日(～)三十一日 東日本大会一回戦
七月三十日 於上智大
栄光 2-1-3 晴星
不運一回戦で晴星に惜敗、大会から姿を消す。

石神井高校と練習試合
八月四日 於県営
栄光 0-1-4 石神井
夏休み練習
中学 八月十四日(～)十七日
高校 八月十五日(～)十八日
国体県予選
八月二十日(～)二十五日

編集

後記

わ二号は編集が夏休み中のことである。片瀬中学との練習試合

奥田記

たので楽なことは樂であつたが、原稿が集まらないのにはまつたく閉口した。一月半もまえから部屋に募集の要領を書いて貼つて置いたのに締切りまでにはとうとう一つの原稿もこなかつた。それが一回間伸びし十日伸びし結局一ヶ月も伸びてしまった。

とくに高一、中三是ひどかつたこんなことで未年、その次とこの雑誌が続いていくだろか、高一の者は「いざとなればやるさ」とかのん気なことをいつているが、最初の計画では高三の人一人に一筆何か書いてもらおうと思つたが何もこの忙がしい時に無理に書いてもらわなくて、卒業して大学にも入つてひまになつてからゆづくり書いてもうおうと考え、この号には主婦であつた栗原さんに代表として感想をよせてもらつた。

創立五周年を迎えて発展を続ける我が蹴球部とともにこの幼い雑誌タツシユが発展していくことを願つてやまない。

「 マッショウ 」一九二号一

昭和三十二年九月五日印刷
昭和三十二年九月八日發行

發行所

東光学園蹴球部

編集責任者 奥田斐規

印刷所

横浜市金沢区泥龜町一丁目七

光 有 社

— 非 売 品 —

編集長 奥田斐規
編集委員 青木盛邦
金沢 洋